
トイレットペーパー戦争

国高ユウチ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

トイレットペーパー戦争

【Nコード】

N72730

【作者名】

国高ユウチ

【あらすじ】

向坂藍は自称根暗で無口な女。佐倉葵は学校で最強と名高い番長様。色んな意味で擦れ違う二人のじれじれ勘違いストーリーです。他にも色々なキャラクター登場予定です。

* 女の子総受けで、不定期更新です。

素敵な挿絵を頂きました！（前書き）

ごんたろう様から頂いた嬉しい二人のイラストですw

本当に小説以上に素敵に描いていただいて、ありがとうございます

！！

幸せですーww

素敵な挿絵を頂きました！

> i 1 4 9 9 2 — 2 0 8 4 <

トイレットペーパー戦争の葵君と藍ちゃんの素敵イラストをこんたろうさんから頂きましたw

イメージぴったりの絵を、ありがとうございます！！

トイレットペーパーを投げる番長と、怒りに震える藍ちゃんの姿がとても素晴らしく表現いただいてますw

擦れ違いまくりな彼らの想いを書くなれば・・・

葵『こつち振り返んねえかな・・・振り返るといいな・・・てか振り返ってくれ、マジで』

藍『禿げる。マジで毛根が死滅する。宣教師ヘアになる。勘弁、本気で勘弁してください』

でしょうか（笑）

トイレットペーパー戦争

私の名前は向坂藍。むきさかあい

至って一般小市民であり、大勢に埋没するタイプの花の高校二年生である。

性別は女だが腰を超える黒髪以外は性別を証明する術を持たない、すんとしたスレンダー（ここ強調）な体つきをしている。

自慢じゃないが根暗な性格をしており、テレビから出てくる某ホラー女のような外見のおかげか、それとも極度の口下手が災いしてかこのクラスに友達是一人も居ない。すいません、少し見栄張りしました。このクラスだけでなく学校に友達は一人も居ない。

友達は居ないが試験の最中だけ知り合いが増えノートが消えていく、それが私のポジションだ。

鳴かず飛ばずを体現しているような私だが、最近とても深刻な悩みがある。

そしてそれは、先ほどから後頭部に直撃しているトイレットペーパー（何故そのチョイスか判らない）を無言で投げ続ける男にある。

いや、別に後ろを振り返って確認したわけじゃないが、絶対にその男がやっていると確信している。

だってさっきから全力で救難信号を出しているのに、先生は顔から滝のような汗を流して視線を逸らしているし、明らかに突っ込み部分が全開なのにクラスメイトは誰一人として突っ込まない。

おかげで足元には投げられたトイレットペーパーの屑がたまりつつあるし、どうせこれを片付けるのも私かと思うと心から憂鬱にな

る。

そして私の憂鬱をさりげなく貯蓄していく男は私の席のすぐ後ろに着席していた。

その名も佐倉葵^{さくらあおい}。苗字も名前も可愛らしいが、本人は可愛さと正反対の位置にいる。見た目は頑強なアメリカンフットボーラーだ。私の貧困な発想から出る彼の体型に対する最大の表現はこれに尽きる。

太く短い首の上には、有り得ないくらいの三白眼と太い眉が存在している。坊主一步手前に刈り取られた髪型と耳に開けられた複数のピアス。身長は小柄な私の優に四十センチは上を行く。明らかに只者じゃないオーラを撒き散らすこの男。時代錯誤もいいところだが、私の学校に存在する番長と呼ばれる男だったりする。

冗談抜きで喧嘩上等を素で口にする男だ。実際一度だけ私も彼が喧嘩をしているのを見たことがあるが、それはもう怖かった。何が怖いって凶悪に歪められた顔や、楽しげに弧を描く唇、振り上げられた拳についた血とかそんなものではなく、その一方的な強さに怖気が立った。

小心者の私は暫く惚けて見ていたが、我に返った瞬間にどうすればいいか必死に脳を働かせた。それはもう、これほど必死に何か考えたことはないと言れるほどに、フル回転だ。結果私は持っていたハンカチを犠牲にし、そこに番長の意識がそれた瞬間ダッシュして逃げた。そしてそれは何気なく三年も前の出来事だったりする。

そう、私は運が悪い事に番長と同じ中学出身だ。折角県内でも有数の進学校へ進んだのに、自由が校風の学校で自由すぎる学園生活を送る番長は頭の出来も宜しかった。

それでも私と彼の接触は今まで無かったのだ。 クラス替えで、同じクラスになるまでは。

アイウエオ順などと捻りも何もない座席順で並べられた机をこれほど怨んだ日は無い。おかげで後ろから二番目の席の私は、同じサ行の番長の前になってしまった。短い人生であれほど絶望した日もないだろう。

考えても見て欲しい。友達居ない暦更新中の私が新たなクラスに進級したのを期に、心機一転頑張るつもりだったのに、後ろの席が番長。折角後ろから二番目という高ポジションであるのに、後ろの席が番長なのだ。

どうすればいいの学園生活。これじゃ我^{がくえん}苦延生活の当て字の方がしっくり来てしまう。

しかも何を考えているのかこの番長、不良なら不良らしく授業をサバればいいのに毎回出席した挙句、人の後頭部に物を投げつける奇癖を持ち合わせてると来たもんだ。

レディの頭に物を投げるなど教えてもらわなかったのか。いや、私如きレディとは言えないかもしれないが、チビな私は彼の視界を邪魔するわけでもないだろうに、何ゆえ！ここまで激しく後頭部にものを投げられなくてはいけないのか。

いや、確かに初日の消しゴムよりはマシだけでも。投げては拾いを繰り返していたあの日より番長的にもマシだろうけど、いい加減にして欲しい。

しかし哀しいかな小心者で口下手な私は今日も黙って前を向き続

ける。

気にしては駄目だ。気にしては駄目だと心の奥で呪文を唱えながら。

気がつけばノートに板書されているのが黒板の授業内容ではなく魔方阵だったとしても誰も私を責めまい。むしろ助ける気がないくせに責めやがったら許さん。この番長を熨し付けてくれてやる。

ぎりぎりぎりと言葉ペンで出る濃度の最大の濃さでノートを取っていた私は、不意に後頭部に受ける衝撃がなくなっているのに気が付いた。

慌てて床を見ると、トイレトペーパーで屑の山が出来ていた。それを瞳に映した瞬間、密かにガッツポーズを取る。

やった。私は奴に勝った。ついに手持ちのネタが尽きた奴は、攻撃手段を失ったのだ。

これ幸いに黒板を眺め猛烈な速さでノートをとっていく。記憶と速記は数少ない取り得の一つで、気分が良いと筆も進んだ。しかし、それも束の間のことだった。

こつん、と頭に衝撃を受け、軽い音を立てた何かが私の机に転がっていく。

コロコロコロと間抜けな音を立てたそれは、トイレトペーパーの芯だった。

ぶつん、と頭の中で何かが切れる。

「先生」

「な、何だ！？」

席を立ち上がり静かに声を発すれば、面白いほどに震えた声で先生が返事をしてきた。

僅かに俯き下から睨み上げるように先生を見て、にっこりと微笑む。こんなすがすがしい笑顔を浮かべたのは何年ぶりか。極度の人見知りゆえに外で笑うなど思い出せない過去だ。

音を立てる勢いで固まる先生に私は肅々と申し出た。

「ちょっと失礼」

「は？」

返事も聞かずに教室を飛び出す。

これ以上無いくらいの速さでトイレに駆け込むと、新品ではなく使用途中のそれをトイレの中からぶん取ってきた。新品など奴には勿体無い。

そして教室に入ると自分の席の前まで歩く。

そしてやや驚いたように三白眼を見開く番長に、にこりと柔らかに微笑んだ。

「小市民舐めんな！」

その日、三年の期間を経て、私は初めて番長と向き合った。

そして番長の顔面に全力でトイレトーパーを投げつけた女として、私の名前は不名誉にも学校中に広がったのでした。

そう言えば、学校で三言以上話すのも久しぶりだった気がする。

トイレトペーパーに想いを乗せて（前書き）

先回の葵君視点です。

トイレトペーパーに想いを乗せて

俺の名前は佐倉葵。さくらあおい

県内でも進学校と呼ばれる高校に通ういたって普通の男子高校生だ。少しばかり普通と違うのは、俺が学校で番長と呼ばれていることだろうか。降りかかる火の粉を遠慮なく振り払っていたただけだが、気が付けば不動の地位を確保してしまった。

もっともそれは中学時代も同じだったので慣れた展開だ。敵つすぎる顔や、でかすぎる体、そうして発するオーラが気に入らないと因縁をつけられるのだが、そんなものどうしようもない。

下らない因縁をつけてきた奴らは、二度とそんな口が聞けないように丁重に相手をしてやっている。おかげで今ではどんなに混んでいる昼の購買も姿を現すだけで人が避けてくれる。顔面神経痛かと聞きたくなるくらいに引きつった顔をした奴らを尻目に、最高峰と名高い焼き蕎麦パンを手にするのが最近の密かなブームの一つだ。

高校も二年に入り心機一転、最近の俺は新たな気持ちで学園生活に挑んでいる。

去年まではサボりがちだった授業も毎回きちんと出席している。授業に出ると説教を垂れていた教師があまりの真面目っぷりに病気かと問いかけてくるくらいに。

だが教えてやるつもりは欠片もないが、それにもきちんと理由がある。

そもそも俺がいかにも肌に合いそうに無いこんな進学校を選んだのは、俺の野望を達成するためだ。校風が自由とか進学先が有名大

学とか、就職率の高さとか、そんなのは始めから歯牙に掛けていない。

県内屈指と名高いこの高校のその自由度の高さのために狭き門だ。勉強さえ出来ればある程度の自由が認められ、髪を染めたり制服をアレンジしても口煩く言われない。

さすがに俺みたいに出席率ギリギリまでサボったり、喧嘩上等と片っ端から受けて立つと呼び出しの憂き目にあうが、それでもまだ退学に至ってないのは偏に俺の成績が上位に食い込んでいるからだろう。この学校で上位ということは、将来有名大学へ進学は保障されたようなものだ。多少の問題があっても、将来性を買われ不問となる。

一年の時は学力を平等に伸ばすためと称してランダムにクラス分けされるが、二年に上がると学力別にクラス分けがされる。俺が選んだのは理系。そして成績から自動的に理系の特進クラスへ割り振られた俺は、今年漸く密やかな野望を達成した。

視線をずっと斜め下にやる。俺よりも四十センチ以上身長が低い彼女はそうしないと視界に全てを収められない。

今時染められていない腰を超える豊かな黒髪に姿勢よく伸ばされた背筋。髪の間から覗く耳は雪白で、触れれば折れてしまふんじゃないかと思えるくらいに華奢な体型をしている。体つき同様顔も小さく、小作りなそこには長い睫毛に装飾されたオニキスの瞳が存在する。ちょこんとした鼻に貪りつきたくなるふつくらとした唇。

男であれば誰もが庇護欲を掻き立てられる。そんな全てを体現した理想の女がそこに居る。

彼女の名前は向坂藍。さきさかあい

子ウサギのように警戒心が強く、無口でとても大人しい性格をしている。その声を聞く機会は教師に指名されたときくらいしかなく、たまにそれ以外で発言しても三言以上は話さない。

彼女の基本スペックは『はい』『いいえ』のYES/NO枕のような二択だ。

表情も大きく動かず、僅かに眉をしかめた顔か、もしくは無表情で俯いているか。楚々とした仕草でのんびりと行動し、独特のペーソのおかげか彼女に自分から声を掛ける猛者は中々居ない。

ちなみに抱きしめたくくなるような愛くるしさを持つ彼女に懸想する男は中々の数が存在するが、互いに牽制しあって結局親しくなれないのが現状だ。女どもは並んで比較されるのが嫌だとか普通に憧れるとかで遠巻きにしているし、とにかく彼女を別格と見ていた。

それも仕方ないかもしれない。

見た目もいいが、スペックも凄いのに向坂藍だ。試験を受ければ常に首位。スポーツをすればぶっち切り。ならば料理が苦手とか裁縫が苦手とか何かあるだろうと思うが、家庭科の授業の成果を噂で聞くとそれもなさそうだった。

さらに解剖の授業では男ですらびびる蛙の解剖を表情一つ変えずにこなした伝説もある。男よりも男らしいとある意味名を馳せていた。

可愛くて格好よくて頭良くて運動神経抜群。

どれだけ超人なんだと突っ込みたい彼女は、実は俺の三年越しの

片想いの相手だったりもする。

実は同じ中学校出身だった俺と向坂藍なのだ。

中学二年の初めに転校してきた彼女は、今も小さいが今よりももう少し小さかった。

真正面から顔を合わせたのも話をしたのも一度だけ。

けれど俺は、その一度でどうしようもなく彼女に恋してしまったのだ。

その日も懲りもせずに喧嘩を吹っかけてきた相手を血祭りにしている最中だった。

まだ成長期だった俺の体はその当時180前後しかなかったが、それでも喧嘩相手の自称先輩方に苦戦というほど挺子摺りはしなかった。

売られた喧嘩は徹底的に、反撃する気もしないくらいにボコるが俺のモットーだ。逆らう気が起きないくらい、訴える気を萎えさせるくらいにとことん鬨り尽くしていると、不意に背後から視線を感じた。

襟首を掴み先輩Aを持ち上げ、足の下に呻いている先輩Bを踏みつけながら振り返ると、そこには子ウサギを髣髴とさせる小柄な美少女が立っていた。

黒々とした大きな瞳をより大きく見開く様は、零れ落ちてしまうのではないかと心配してしまうくらいで、真っ白な肌は僅かに青褪めている。鞆を胸に抱き堪えるように唇を噛み締めた彼女は、思わず手を伸ばして抱きしめなくなるほど俺の中の何かを攪った。

唐突な感情の到来に目を見開いて固まっていると、我に返ったらしい彼女は凄いい勢いでポケットを探るとハンカチを取り出した。

『これ、使ってください！！』
『は？』

無理やりに押し付けられたハンカチはウサギのワンポイントの刺繍がしてあり、それに気を取られた瞬間に素晴らしい勢いで彼女は走り去っていた。翻るスカートから覗く白い肌がとても眩しかったのを覚えている。

俺としては怪我をするのは日常茶飯事だったし、その際怯えて逃げられてもハンカチを差し出すなんて優しさに触れた事はない。

喧嘩中の俺は悪友すら怯む凶悪面をしているという。それなのに、ふるふると震えながらハンカチを差し出すなんて、どんな女神だ。

すっと呆気なく紐無しバンジーの勢いで恋に落ちた俺は、三年間の間ずっと彼女と親しくなるチャンスを探していた。

そうして、ついにこの絶好のポジションを得たのだ。

今まで佐倉葵という名にはコンプレックスしか持ってなかった。名前も苗字も女のような怨んでいたが、彼女と席が前後するなら、こんな僥倖は無い。

毎日毎日登校すればすぐ前に愛しい彼女の姿。これで真面目に授業に出なくてどうするのだ。

中学二年までは中の中をウロウロしていた成績を、死に物狂いで上げたのは、彼女と同じ高校に入るためだ。転校してからずっとオール満点に近い成績で主席を突っ走る彼女が選ぶ高校は限られていた。中学卒業と同時に縁が切れるなど耐えられず、だからこそ昼夜問わずに努力した。授業をサボって参考書を漁り、屋上で一人単語を記憶。三年になれば内申のために真面目に授業に出たり、先生の間を回ったりした。

努力に努力を重ねて得たこの席を、俺は絶対に譲る気は無い。

このさき席替えなどという暴挙を許す気はないし、いつそ住み込みたいくらいだ。

だが折角の好ポジションを得たものの、同じクラスになって一月、彼女と俺の間に発展は無い。

何故なら極めて無口な性質の彼女と、自分から話しかけるほど話題の無い俺。

プリントの配布の時にちらりと見える横顔に焦がれるのみで、全く接触する機会が無い。

俺は考えた。考えて考えて考えて、奥手の俺でも出来る手段を思いついた。

それがこれ、背後の席から気がついてアピール。

後ろの席だからこそ出来るアピール方法は至って簡単。背後から消しゴムなどを飛ばし、落ちたところを拾ってもらうという斬新なアイデアだ。

画期的な閃きを俺はすぐさま実行した。そう、まずは何を投げるかだが、思案して消しゴムとした。

投げる際に力が籠り後頭部直撃してしまったが、今更あとに引けない。

後頭部への衝撃にびくり、と体を震わせる彼女に目を細め、俺は来るべき瞬間を待った。

何が当たったのかと視線を巡らした彼女は、床に落ちている消しゴムに目をやり暫し動きを止める。

五分ほど考え込むようにそれを眺めていたが、徐に俺の消しゴムに手を伸ばすと、自分の席に持っていてしまった。

予定外の行動に焦っていると、前から白くて小さい手が机に置かれる。

戻ってきた俺の消しゴムには、律儀な文字で『落しましたよ』と書かれた手紙が巻きついていていた。

彼女そのものを表すような繊細で流麗な字体に見惚れつつ、文字も綺麗なのかとうつとりとする。宝物にしようと顔を綻ばし、そそくさと筆箱に仕舞った。

一時間ほどぼやんと幸せに浸っていたが、不意に俺は気がつく。俺の目的は何一つ達成されていないと。

俺は話しかけて欲しいのだ。そこから色々と膨らませ、あわよくば男女の関係になりたいのだ。

華奢な体を思い切り抱きしめ、大きな瞳に俺の姿を映し、その愛らしい顔で微笑みかけて欲しいのだ。

自分のふがいなさには舌打ち、俺は第二段を手についた。消しゴムは失敗したので今度は定規だ。シャープペンも考えたが、あの先っぽが刺さったら危ない。僅かでも怪我をさせたくないで、鑢で定規の角を削ぎ落としてからそれを構える。

せいや、とばかりに投げれば、また彼女の後頭部にこん、と当たった。

その音は思ったよりも教室に響き、何事かとクラス中の視線が集中する。目を丸くしてこちらを見る教師やクラスメイトを睨み付けると、彼らは一斉に顔を逸らした。

一方頭に定規が当たった彼女は、静かに黙り込んでいた。身動きせずに黒板を向いていたかと思うと、また不意に視線を床に落とす。そうして見つけた定規を取ると、先ほどと同じようにして俺に返却した。

ほくほくした気持ちで巻いてある紙を解くと、そこには一言『気をつけてください』。やはり綺麗な字が書かれていて、俺の宝物は二つに増える。

そうしてまた時間が経過し、気がつけば一日が終わっていた。

翌日から俺は考えた。万が一にも怪我をしないようにハンカチでぐるぐるに巻いたノック式のペンを投げたり、拾われるとすぐに終わってしまうので消しゴムを乱切りにして一個一個投げたりと一生懸命工夫した。

その甲斐もあってか、毎回律儀に返却されるそれらには紙がしっかり巻きついており、俺の宝物もどこぞ増えた。

しかし、一週間ほどたったある日、巻きついた紙に俺は目を丸くした。

『後頭部が痛いです』

訴えに俺は動揺した。確かに投げたもの一つ一つはダメージは大

きくないかもしれない。それでも蓄積すれば痛みはたまる。

しかしながら俺としては折角得たコミュニケーションのチャンス
を棒に振るのも嫌で、どうすればいいか徹夜して悩んだ。その結果
俺は名案を閃いたのだ。

翌朝、学校に登校すると同時に合鍵を使い保健室へと入り込む。
そこに常備してあるはずの目当てのものを見つけると、ホクホクで
それを教室へと持っていく。

アイテムの名はトイレットペーパー十二ロール入り。彼女に当て
るので勿論新品で封が空いていないものだ。

これなら痛くないだろうし、その上嬉しい事に長持ちだ。それに
紙だから文字を書くことも出来る。今までの返事を書いたら喜んで
くれるだろうか。

機嫌よく席に着いている俺を見た隣の席の男が悲鳴を上げたが、
それくらいは赦してやれる機嫌の良さだ。彼女の反応が楽しみで仕
方ないと、気分よく授業の開始を待った。

最近の彼女は授業時間すれすれまで席に着かない。何処に行つて
いるか知らないが、親しくなった暁には教えてもらいたいものだ。

授業が始まると俺はすぐにトイレットペーパーの封を切った。

記念すべき最初のロールは、右上段の端に置いてあったものに
する。手に取るとミシン目に合わせて切り、サインペンを取り出し
た。本当はカラフルな色ペンがいいのだろうが、俺が持っているの
は赤と黒だけだ。

少しでも好意を訴えるならやはり赤かと思い、ぼきゅんと間抜け

な音を立てて蓋を取る。何を書こうか暫し迷い、文章ではなく記号にした。所謂『ハートマーク』。芯までしっかりと塗りつぶすと、少しかだけ形が崩れたが中々の出来だと満足できた。

それをくるくると丸めていつもどおりに投擲する。

びくり、と体を震わせた彼女は、視線を彷徨わせ床の上にトイレツトペーパーを見つけ目を丸めた。

大きな瞳が驚きで見開かれる様はやっぱり可愛い。今すぐ腕にぎゅうぎゅうに抱きしめて頬擦りしたいがその衝動を必死に抑える。そんなことをしたら恥ずかしがり屋の彼女に嫌われてしまう。

早く拾ってくれとワクワクしながら待っていたが、暫くじつとそれを眺めた後、彼女はノートへと向き直った。猛烈な勢いで何かを書き始めたが、どうしたのだろう。いつもなら拾って返してくれるのに。

不思議に思いながら第二段、第三弾と投下していく。

しかしながら望むリアクションを得れないまま、本日最後の授業へと突入してしまった。

朝からずっと定期的に投げ続けたトイレツトペーパーの残りは後わずかだ。一日一ロールなら後十一日は持つと思いつながらも、返事がないならまた消しゴムや定規に変えた方がいいだろうかと僅かに悩む。

俺の思いの丈は最早床に散乱し、休み時間に勝手にゴミと判断した拳句捨てようとした生徒を睨み倒すほどに貯まっている。報われない想いの行き場のようでは何だか切ない。

ため息を吐きつつまた新たにペーパーを取ろうとし、感触がなくなっているのに気が付いた。どうやら紙もつきてしまったらしい。俺の手の中にあるのは柔らかな彼女の肢体ではなく、身包み剥がされて滑稽な様のトイレットペーパーのなれはてだけだ。

暫し指でそれを弄ぶと、もう一度サインペンを取り上げる。
書きたいことも伝えたいことも、たった一言。

『好きです』

トイレットペーパーの芯にこれまでと比べ物にならないくらい小さな文字で書くと、想いよ届けと投擲した。

こつん、からころから。

彼女の後頭部に当たったそれは、床に落ちるのではなく奇跡的に彼女の机の上に転がる。

教室中の視線が彼女へ集中した。誰も何も言わず、針を落としても響きそうなくらい室内は静まり返っている。

一体何がどうしていきなり周りが動きを止めたのか知らないが、俺はただ一心に彼女がどう動くかだけに気を取られていた。

静寂に支配される中、不意に彼女が動いた。

「先生」

「な、何だ!？」

拳手をした彼女は流れるような動きで席を立ち上がると教師へと声をかけた。彼女から誰かに呼びかけるなど滅多にないのに、その幸福を拝した教師を睨み付ける。ぎくりと体を強張らせた教師は声を震わせやつのことで彼女に返事をした。

静まり返った中でも臆することなく綺麗な声を響かせる彼女にうつとりと見惚れていると。

「ちよつと失礼」

「は？」

啞然とする周りも構わず彼女は教室から飛び出ていった。

誰も止めることが出来ないくらいの早業で走っていった彼女は、僅かに頬を上気させ息を切らして帰ってきた。

淡く染まる頬が何とも艶っぽく愛らしい。食べてしまいたいという望みと、他の野郎は見るんじゃねえと沸き起こる嫉妬で翻弄される。

だが教室に戻った彼女は他の誰にも目もくれず、俺だけを一直線に見詰めていた。

ついに想いが届いたのだろうか。

姿勢を正してゆっくりと歩いてきた彼女は、俺の数歩前で足を止

めると、それはそれは輝かしい笑顔を浮かべた。

初めて見る笑顔は想像していたよりずっと可愛く、締め付けられる胸に呼吸困難に陥りそうだ。何も出来ずにただ見詰めていると、徐に手にした何かを彼女は振りかぶった。

「小市民舐めんな！」

絶叫と共に投げられたのは、つい先ほどまで俺が投げていたものと同じ『トイレットペーパー』。

柔らかな髪で出来てくるくせに、顔面にヒットしたそれは中々の威力を込めていた。

ふぐつと変な声が漏れる。この衝撃は、もしかしたら鼻血が出るかもしれない。いや、男として好きな子の前で鼻血はない。

気力で堪えてい視線を上げると、フーフーと毛を逆立てる子猫のように煌く瞳で彼女がこちらを見詰めていた。

あれ？これってフラグが立った状況？

乱れた髪が頬に掛かり、それを掌で掻き上げる。ふさりと揺れる黒髪の動きすら見惚れずに居られない。

苦節一月と一週間。

漸く声を掛けて貰えて、俺は恋のステップを一つ上った。

続・トイレットペーパー戦争

私の名前は向坂藍。さきさかあい

至って一般小市民であり、大勢に埋没するタイプの花の高校二年生である。

クラスの中に一人は居る友達も出来ない根暗なタイプが私であり、今日も今日とて会話らしい会話など一つもせずに一日が終わる。

小学校の時分から親友を作るのが夢なのだが、どうやら今日も叶いそうになかった。ちなみに長年想いが募るだけあり、私の親友への理想は高い。

栗色の緩く癖のついた髪をした私とは正反対なタイプの明るくて可愛い子が私の理想だ。何をしてもしもトロい私と違い、爽やかなスポーツ少女だと尚いい。グランドで部活中、ふと顔を上げた瞬間に目が合えば、にぱつと破顔して両手を振ってくれるような、そんな子犬系の女の子が欲しい。

しかし根暗な私と元気少女のとは全く繋がりがなく、めばしい子に目をつけたとしても距離は縮まらない。

そして距離を近づけたくもない男との距離がじわじわと縮まっていくのだ。

私の妄想をかき消すように、今日も今日とて後頭部に衝撃が走る。初めの頃のように消しゴムや定規は飛んでこなくなったが、ある意味それ以上屈辱的なトイレットペーパーがくしゃくしゃに丸めら

れて飛んでくる。

身体的な痛みこそないが、精神的な面でのダメージは計り知れない。

だってトイレットペーパーだ。名前の如く彼らはトイレを住まいにし、用を足した後に利用するものなのだ。トイレ自体が目茶目茶清潔というイメージがない。そりゃたまに高級ホテルとかに足を踏み入れるとその美しさに目を見張るが、ここは学校だ。学校のトイレなどその道のプロでもなんでもない学生が洗うものだ。消臭剤すら安っぽい、長年の汚れが染み付いた場所。

一応どこから手に入れてきたか知れない新品を利用しているが、入手場所がわからないだけに安心できない。まさか家から持参したとは思えないが、大体一日一ロール使うとして、彼の手元には残り七つは残っていた。

初めてトイレットペーパーを投げられてから早一週間。先週の月曜から始まった奇怪な行動は、特進クラスだけで行われる土曜の授業を除き延々と続いている。

ちなみに土曜にトイレットペーパーの襲撃がなかったのは、単純に襲撃者が学校に来てなかったからだ。『奴』は今年に入ってから一度も特別授業に参加しておらず、教師もクラスメイトも誰一人として進言していないため、私にとってその日は唯一の学校での安息日になっている。

そして平和な日曜を挟んでの月曜日。

彼の奇行は相変わらず続いており、もう呪いか何かかと疑いたくなってきた。

初日は流石にぶちきれた私は、奴　恐怖の大魔王もとい、恐怖を募らせる番長の佐倉葵の顔面に向け、女子トイレから失敬してきた使い掛けトイレットペーパーを全力投球した。しかも顔面狙い。当たった瞬間気分は爽快だった。

何しろそれまでの一週間、延々と後頭部を襲撃する物体を黙って受け入れていたのだ。あの、強面番長に逸し報いてやった瞬間の自分の良さつたらない。

しかしそれは本当に一瞬の快感だった。

息を整え我に返れば、あの空恐ろしい三白眼をきりきりと細め、獲物を狙う肉食獣のように喉を鳴らしかねない凶悪な顔をした番長は、まるで呪いでもかけるかのようにゆるりと口角を上げた。天下の悪役も真つ青だよ！と絶叫したいくらい極悪な表情を見た瞬間、私は泣きたくなった。

一瞬の喜びは本当に一瞬でしかない。彼の前では悪魔もないで逃げ出すはずだ。それくらい怖かった。

忘れたいのに心のシャッターでメモリーに刻み込まれてしまったあの笑顔は、毎夜私を唸らせる。何が怖いって眠った後に夢まで出演する奴の執念が怖い。

すっかり萎縮した私は、もうトイレットペーパーを投げられようが、その芯を投げられようが無抵抗主義だ。嘗て平和のために無抵抗を貫いた偉人がいるが、彼に倣って貫いている。

例え後頭部が将来禿げようとも、握っているシャーペンが折れようとも、私は無抵抗だ。

それなのに、ああそれなのにそれなのに。

何を考えているのか、今日も今日とて悪魔は私にトイレットペーパーを投げ続ける。昨日チラリと見てしまったが、彼が投げたトイレットペーパーには赤いペンで描かれたと思しきハートがあった。ひびが入り所々棘が生えている歪なそれは、私への残酷な宣言に他ならないと思う。

曰く、『お前をクロス』的な。なんかそんな感じな。

だってあのハート怖すぎる。心臓に毛が生えているとでも言外に言いたいのだろうか。トイレットペーパー（使いかけ）を顔面投球した私に怨み辛みを募らせているのだろうか。

もう、いっそばっさりやってくれ。生殺し状態に発狂しそうだ。

冷や汗を流しながら今日も授業を受け続ける。このまま行くと登校拒否になるかもしれない。

これは虐めじゃないだろうか。学校で一番の悪に目をつけられている状態じゃなからうか。

根暗であつても今までカツアゲや呼び出しにはあつたことがないのが密かな自慢だったのに、何でここにきて番長に目をつけられたのか。

神様、私はひっそりと生きてきました。清く正しく美しく生きて来ただなんてあつかましいことは言いません。ですがここまで残酷な人生を突きつけられるような何かをしましたか！！？

心からの問いかけは今日も今日とて返事はない。

時計を見れば授業終了まで残り一分。

番長の行為はトイレットペーパーが尽きれば終わる。そしてそれは計ったように一日の最後の授業のチャイムが鳴る瞬間なのだ。秒針を刻む時計をギンギンに睨みつけ早く進めと心から祈る。

そうして今日も、チャイムと同時にトイレットペーパーの芯が投げられ、私の一日は終了する。

不屈の精神とトイレットペーパー（前書き）

葵君視点です。

不屈の精神とトイレットペーパー

俺の名前は佐倉葵。さくらあおい

県内でも進学校と呼ばれる高校に通ういたって普通の男子高校生だ。少しばかり普通と違うのは、俺が学校で番長と呼ばれていることだろうか。降りかかる火の粉を遠慮なく振り払っていたただけだが、気が付けば不動の地位を確保してしまった。

そんな俺も一皮剥けば普通の男子校生と何も変わらない。

普通に学校で授業を受けて、普通に学校で喧嘩をして、普通に学校に片想い相手がいる。

自分で言うのもなんだが、俺はかなり一途な性格だ。何しろ中学から足かけ三年も同じ人に恋している。

奇跡のような偶然と根性を入れた努力のおかげで、俺の恋の相手は俺の前の席に座わっている。凜と背筋を伸ばした小さく華奢な可愛らしい少女が俺の恋の相手だ。

彼女の名前は向坂藍。むきさかあい

腰を超える艶やかな黒髪と、白い肌が特徴的な子ウサギのような女の子だ。その顔は体と同じで子作りに出来ており、唯一大きな瞳は長い睫毛に装飾されている。

可愛いものが好きなんて趣味はなかった俺だが、彼女を目にした三年前から密かにウサギグッズを集めている。

勿論、黒い毛に黒い瞳のウサギちゃんだ。肌の色は白いのだが、彼女の場合はその瞳と髪の影響が強すぎて黒の方がしっくりくる。別に、三年前に彼女から貰ったハンカチのワンポイントが黒ウサギで、それに影響されたとかそんなんじゃない。

ウサギ好きが高じて今ではウサギも二匹飼っている。ちなみにウサギの名前は『あいちゃん』と『あおいくん』だ。勿論番で飼っている。

ミニロップの二匹はとても小さく可愛い。『あいちゃん』の毛色は黒く、瞳の色も同じ色だ。大きな瞳で『あおいくん』よりも睫毛が長く大人しい。

対して『あおいくん』はゴールデンオレンジの毛色にブラウンの瞳を持つ。配色も俺に似ているが、コンパクトサイズのミニロップにしては体がかいところも俺に似ている。ついでに『あいちゃん』激ラブで、『あいちゃん』に触ろうとすると飼い主の俺にも食いつく凶暴な性格だ。

しかしながらどれだけ盾突こうと所詮はミニウサギ。最終的に俺は『あいちゃん』を腕に抱き、『あおいくん』を見下ろして高笑いする。ウサギの癖に俺の『あいちゃん』を手玉にとろうなど百年早い。『あいちゃん』の番でなければ滅するところだ。

ちなみに『あいちゃん』が絡まなければ俺と『あおいくん』の相性はすこぶる宜しい。『あいちゃん』よりも好奇心旺盛な『あおいくん』は猫じゃらしにもアタックする果敢な精神の持ち主だ。今朝も少し遊んでやったら、その短すぎる前足でタシタシやってきた。けれど残念にもやや鈍い『あおいくん』は、今日も結局猫じゃらしをしとめられなかった。その様子を俺のベッドの上から眺めていた『あいちゃん』は、顔を上げた『あおいくん』と目が合つと、ふい

つと顔を逸らしていた。

今のところ、俺の方が『あいちゃん』と仲がいい。ざまあみろだ。

話しは逸れてしまったが、現在の俺はそれはそれは彼女に似ているウサギに熱中している。

ウサギグッズを集めるためなら開店前の店にも並ぶし、悪友を無理やり引っ張ってフェミニンなシヨップにも足を踏み入れる勇気を手に入れた。

しかしながらそんな勇気を手に入れても、奥手で恥ずかしがり屋な俺は、未だに自分から彼女に声は掛けられない。

ウサギの抱き枕を抱いて眠れる俺だが、ウサギのように可愛らしい彼女には照れてしまつて萎縮するのだ。

そんな奥手な俺だが、先週ついに始めの一步を踏み出した。

彼女との切欠が欲しくて毎日毎日『落し物拾つて大作戦』を決行していたのだが、地道な努力が花開いた。

手を変え品を変え角度を変えてありとあらゆるものを彼女に向かって投げていたのだが、いつもなら落し物を拾つて手紙を巻きつけるだけだった彼女がリアクションを示してくれた。

そしてさらにあるうことが俺の顔を見て顔を紅潮させながらあの愛らしい鈴の音のような声を俺に向かって響かせたのだ。あの瞬間、確かにキューピッドがラッパを高らかと鳴らしたのが聞こえた。

ファンファーレどころかパレードの凱旋時並の音楽隊が総出演だ。それくらい俺にとっては快挙だった。

彼女の顔が真正面から見れるのが嬉しくて、その瞳にうつるのが

幸せで、どうすればいいか判らないほどに舞い上がった。
つい、微笑んでしまうと、彼女はびくりと体を震わせ微笑み返してくれた。

あの、向坂藍が、俺に向かって笑ってくれた。

それからのことは覚えていないが、その日一日天国にいるかのよう
に舞い上がっていたのだけ覚えている。何しろこんなに愛している
『あいちゃん』と『あおいくん』の餌やりを忘れそうになっただ
らいだ。自分で自分の浮かれ具合が怖いくらいだった。

ちなみに俺の忠実な心友の二匹は、俺ののろけを小三時間を延々と
愚痴一つ言わずに聞いてくれた、友達甲斐があるいい奴らだ。人
間の方は駄目だった。たった一時間も付き合ってくれず、俺は即効
で捨てられた。

まあ、それはともかく、俺としてはここから漸く俺の恋が發展す
るのだと思っていた。

そう、思ってたんだ。

それなのに現実には甘くない。どれくらい甘くないかというと、激
から麻婆豆腐にハバネロをふんだんに投入し、さらにラー油をぶっ
掛けるくらいに甘くなかった。

甘党の俺には辛すぎる辛さの現実、受け入れがたいほどにハ
ードだ。

鬱な気分になりながら、千切っては投げ、千切っては投げを繰り返す。ちまちまと絵を描くのに使っていた赤のサインペンも切れそうだ。心なしか俺のハートを映したその絵も歪に見える。

頑張っているのに、初日以来は彼女はちらりともこちらを見てくれない。理由が判らず、俺もどうすればいいか判らない。

喧嘩であれば気にせず突っ込めばいいものだが、彼女相手だとそれも出来ない。臆病な男と笑われてもいい。もう一度だけ、あの笑顔が見たかった。

最後に残ったトイレットペーパーの芯に、あの日と同じ文字を書く。

『好きです』の一言は、どうやったら届くのだろう。

切れかけたサインペンの所為で所々消えた告白は、まるで自分そのものみたいで更にずどんと落ち込んだ。

顔を上げればもうすぐ授業終了だ。

どうやら、今日の求愛行動もここまでらしい。

震える手で芯を握ると、想いをこめて彼女に投げた。

トイレトペーパーは呪詛の種

私の名前は向坂藍。むかしばい

至って一般小市民であり、大勢に埋没するタイプの花の高校二年生である。

後ろの席の悪魔・・・もとい、番長が私にトイレトペーパーを投げ始めてから早十日目。

今日も今日とて奴は後頭部狙いでばこぼこ投げ続けている。

もしかして彼は私の毛根を根絶やしにしようと企んでいるのだろうか。

量が少なくもないが多いわけでもない頭の真ん中に、しかも律儀にほとんど同じ場所に投げ続ける彼は、私を昔日本に来て宗教を広めようとした、かの有名なカップヘアの人と同じ髪型にしようとしているのだろうか。

つい十日前までは化学の教師のスダレた頭を見て『命儚毛』いのちはかなげと読んでいた私はもうここに居ない。

それだけにあの薄い命を大事にしている彼に教えてあげたい。

後頭部に刺激をやれば髪増えるって言うのは嘘ですよ、と。

事実私は彼の攻撃を受け始めてからシャンプーするたびに十本単位で髪が抜けてる。

同士として、あのスダレにワックス塗りたくっている先生に教えてあげたい。

今の私は毛根大事に、髪の手大事にの気持ちで徐々に芽生えてきている。

志だけ平和主義者の偉人であっても、髪型はふっさりもっさりが

いいのだ。

この髪がなくなれば、さりげなく俯いて授業中に寝るときどうすればいい。

否、そもそも後頭部に刺激を与えられ続け、どうしようもない悪意を背後から浴びせられ続ければ眠る余裕は無いが、スキンヘッドにするには私は勇気が足りなすぎる。

一瞬想像したがやはりない。無理無理無理、絶対にない。

あんなのは綺麗な女の人がやるから赦されるのだ。私程度では絶対に駄目だ。

そう言えば後ろの席の番長もスキンヘッド一歩手前の髪型をしていた気がする。

あまりまじまじと見たことはないが、触ったらじよりじよりとしそうな感じだった。

一生触る機会もないだろうし触りたいとも思えないが、綺麗な頭の形をしていそうだった。

もしかして、番長は私の髪の毛に嫉妬してこんな行為を繰り返しているのだろうか。

それならいつそ切ってしまおうか。

スキンヘッドか宣教師ヘアになる前に、妬みの元であるこの髪を切ってしまおうか。

指先で黒髪を一房摘むと、そっと眺める。

艶やかでキューティクル満載のこの黒髪は、私の自慢できる唯一のものだったが、これの所為で毎日呪詛を掛けられるならもう切ってしまうって構わない。

髪を切ってついでにこの呪いの行為も止めさせたい。

つらつらと考えていると、気の抜けたチャイムが鳴り響く。

昼休みの合図だ。現在の学校生活でHRの終わりと同じくらいに待ち望んでいるが、この時間は同時に苦痛の始まりだ。

友達の居ない私には一緒にご飯を食べようと誘ってくれる人は居ない。

これまではずっと教室でご飯を食べていたのだが、番長にトイレットペーパーを投げた翌日から私はここで食事する勇氣は失った。

かといって弁当を持って教室を出ても、後ろに憑いているのだ。誰って、勿論番長が。

始めは気のせいかと思いい学校中を歩き回ったが、生まれたばかりのカルガモか！？と突っ込みたくなる勢いで付いて来る。

しかもトイレットペーパー持参で。

歩き回った末に得た安息の地は女子トイレ。勿論そんな場所でご飯を食べれるほど図太くない私は、五分ほどして番長も居なくなっただろうとそこから出た。

しかし私の考えは限りなく甘かった。

何を考えているのか、それとも何も考えて居ないのか。

トイレットペーパー片手にトイレに足を向ける生徒全員にガン垂れつつ、番長はそこに立っていた。

そう、女子トイレの入り口付近に、まるで仁王のように堂々と。

年頃の男子生徒としてどうなんだ、それ？と思うが、そんなこと勿論口に出せるわけがない。

口に出せるならとうの昔に『いい加減にしろよ、この腐れ野郎！女舐めんな！根暗舐めんな！お前の口内使用済みのトイレットペー

パーで埋め尽くしてやるか！？」程度のことは言っている。

トイレから出た瞬間に見つけた彼からなるべく視線を逸らし、点々と続くトイレットパーパーを眺めながら教室へと戻ったのはもうトラウマに近い。

おかげで私は学校のトイレに行けなくなってしまった。

仕方がないので教室で俯いているのだが、お腹も空いたし精神面でも色々ギリギリだ。

誰かこの空気を壊してください。

神様本当にお願いです。

誰でもいいんです。

汝の隣人を愛せよと仰ったあなたですが、私の隣人はこの窮地を見てみぬフリです。

どうか勇者を降臨させてください。

「ちわーっす！佐倉先輩居ますかー？」

どうやら私の願いは届いたらしい。

ただし現れた奴は空気を壊すが空気も読まない後輩だった。

ざわめいていた教室が一気に静かになる。

へらへらと笑っている目に眩しい金色の髪をした彼は、私ですら知っている有名人だ。

この学校で唯一の金髪の彼は、一つ年下の小倉桂一。おぐらけいち

垂れ目で肩を越す髪を一本に結わえた彼は、何処か犬のような雰囲気を持つ愛嬌のある人物だった。

そしてありえないことに番長を先輩として尊敬している。

入学当日に番長に喧嘩を売って返り討ちにされたことで彼を目標にしているらしいが、私としてはすぐにでも人生の補正をした方が良いと思う。

しかし人見知りがなくその愛嬌から男女共に人気があるらしい彼だが、所詮は番長と同類だ。

喧嘩上等、掛かって来いやと嗤うタイプだ。

実際に私も一度目にしたことがあるが、あれは凄絶だった。

普段はにこやかな様子で友人達の中心に居るくせに、眇めた瞳には狂気が宿り唇から覗いた犬歯は恐ろしさしか感じなかった。

見つかる前にダッシュで逃げたが、あの時の背筋が凍る感じは忘れない。番長を見たとき以来の衝撃だった。

ヘラヘラしながら上級生の教室に物怖じすることなく踏み込んだ彼は、番長を見つけると嬉しそうに駆け寄る。

前門から来る虎に、後門で牙を剥き威嚇している狼。

思わず俯くと、学年ごとに違う室内履きが視線の先で止まった。何故か嫌な予感に顔を上げられないで居ると、髪に何かが触れるのが視界に映る。

思わず顔を上げてしまい、瞬時に後悔した。

「あれー？この人、向坂先輩っすよね？佐倉先輩、同じクラスだったんすか？」

「ッ」

思わず息を飲み込む。

まさか学校有数の有名人に名を知られているとは思っておらず、是非ともお近づきになりたくない彼が文字通り近づいている状況に冷や汗が流れる。

何故彼は自分の名を知っているのか。

もしかして、以前喧嘩しているのを見ていたのを知られていたのだろうか。

だとするとこれは何？お礼参りか何かだろうか？

しかし自分は一般小市民。彼にお礼参りされるような何かはしていない。

ただただ恐怖で身を強張らせじつと行動を眺めていれば、驚いたように瞳を丸めた彼は、ほにやりと何とも緊張感のない笑顔を浮かべた。

その笑顔に一気に体の力が抜け、一体なんだと啞然としてみると彼の指が髪から離れる。

近づく姿にどうするつもりかと再び身を縮め そうして次の瞬間本当に息が止まった。

「ッ！！！！؟؟？」

ドンガラガツシャンガシャシャー的な音を立て、吹っ飛んだ人間を呆然と眺める。

人間が吹っ飛ぶ姿など、テレビのお笑い芸人以外で始めて見た。そして一生見たくなかった。

吹っ飛んだ張本人は床に転がりながら腹を抑えて上半身を起こしている。

痛みを訴えているが、吹っ飛んだにしては余裕がある姿に瞬きを繰り返していると、ぽん、と頭に何かが触れた。

何だと驚き顔を上げると、睨み殺すぞとばかりに瞳を鋭くした三白眼。

今にもビームが出るんじゃないのかと思えるほどの迫力を有した彼は、今度は先ほどの彼が触れたように私の髪に触れると、そのまま指を離した。

何がしたいんだと蛇に睨まれた蛙状態で固まっていると、頭の上からヒラリと何かが落ちてくる。

空中でそれをキャッチし、無言で去っていく番長を見詰めた。

不満を訴える後輩の襟首を手で引つ掛けると、有無を言わずに番長は彼を引き摺っていく。

呆然としながらそれを見送り、番長が居なくなっただころで私は握った何かに視線を落とした。

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

ミシン目一つで区切られたトイレトペーパーに描かれていたのは随分と劇画調なリアルウサギ。

そしてそのウサギの心臓部にはでかでかとハートが描かれ、さらにそれをリアルな矢が突き刺し血が流れていた。

それを見た瞬間、私は生まれて初めて気絶するという体験をした。

保健室で残りの時間を過ごした私は後頭部にトイレトペーパーの襲撃は受けなかったが、目覚めた瞬間に最初に目にしたのは劇画

調のウサギだった。

私はその内本当に呪い殺されるかもしれない。

トイレトペーパーにウサギちゃん（前書き）

葵君視点です。

トイレトペーパーにウサギちゃん

俺の名前は佐倉葵。さくらあおい

県内でも進学校と呼ばれる高校に通ういたって普通の男子高校生だ。少しばかり普通と違うのは、俺が学校で番長と呼ばれていることだろうか。降りかかる火の粉を遠慮なく振り払っていたただけだが、気が付けば不動の地位を確保してしまった。

そんな俺は現在片想い継続中の奥手な男でもある。誰だって甘酸っぱい恋の一度や二度は経験したことがあるだろう。

運と努力の末に俺が手に入れた地位は、初恋の相手の後ろの席。中学二年生で初めての恋は遅いのもかもしれないが、俺にとっては唯一で特別な恋だ。

瞼を閉じれば今でも色褪せない思い出が浮かぶ。喧嘩で傷ついた俺に差し出された穢れない白のハンカチ。ウサギのワンポイントも愛らしいそれは、今でも俺の宝物だ。

俺の初恋の相手、向坂藍は、まきさかあい学校でも有数の美少女だ。悪友が調べた結果では、密かに行われる男子間での美少女投票でベスト3から転落したことはないらしい。

好みはあるだろうが、華奢で色白な彼女は庇護欲をそそるタイプの凜とした美しさを持つ美少女だ。俺にとっては、不動の一位である彼女に似合う花は桜。桃色の花卉が風に舞う中、靡く髪を耳にかける仕草が思い浮かぶ和風美人なのだ。

容姿も美しいが、中身も凄いのが向坂藍だ。

試験をすれば学年一位。運動をすればスポーツ拔群。料理も裁縫も隙はなく、選択科目の音楽だって涼やかな歌声が美しい。

ちなみに俺の選択は美術だが、美術室の隣に音楽室があり、音楽に特に気合が入っていない学校の緩々の音楽設備のおかげで雲雀のような美声が届いてくる。雑音の中穢れなき歌声を響かせる彼女を俺が間違うはずもない。

そんな万能な彼女であれば、勿論ライバルの数だって数え切れないほど多い。

物静かで一人でいるのを好んでいる彼女に声を掛ける男は居ないが、一組の遠藤や三組の佐々岡、さらに三年の山崎や一年の岡部など、学校でも有数のイケメンが彼女を狙っていると悪友から聞いた。無駄に情報網の広い彼からの信頼度の高い情報に、俺の胸が嫌な感じに響いたのは記憶に新しい出来事だ。

どういつもこいつも喧嘩しか特技がない俺とは違い、勉強が出来たり運動が得意だったりピアノが得意だったりと特技がある男たちだ。無駄に秀でた部分があるくせに、さらに天賦の才を得るなど嫉ましくて仕方ない。

しかし残念ながらどれだけ想いを寄せようと、彼女が振り返ることはない。声を掛けてもあの静かな眼差しで見詰められ撃沈する様を見たが、何とも胸がすく想いだった。ざまあみろ。

俺と違いクラスも離れた奴らはアピールする時間もなければ、相手にすらされて居ない。

ちなみに俺はその部分だけ一歩リードだ。

席が前後していることもあり、今日も『落し物拾って大作戦』を執行している。奴らと違い毎日のアピールに予断はない。

しかしながら初日のアピールは成功したのに、それ以降は成果が

落ちているのだけが気に掛かる部分でもある。

最近は顔色も芳しくないし、とても心配だ。

先日は弁当箱を持ってどこかに移動しようとした彼女の顔色の悪さについて行ってしまったが、顔色の悪さが心配でも今ひとつ勇気が出せない俺は自分から声が掛けられなかった。

なので彼女から声を掛けてもらおうと、後ろからトイレトーパーを投げ続けたのだが、体調が悪化したのか彼女はトイレに入ってしまった。

流石に女子トイレの中までついて行くのはできず、かと言ってそのまま放っておくのも心配で入り口で待っていたのだが、暫くして出てきた彼女の顔色は蒼白に近かった。

心配で思わずガン見してしまっただが、彼女はすぐに俯いて移動を始めたので、また後頭部狙いにトイレトーパーを投げ続けた。しかし結局彼女はそのまま教室へ戻ると、弁当も食べずに自分の席で腰掛けて俯いたままだった。

俺も心配で心配で胸がはちきれそうになり、結局ご飯を食べられなかった。

その日から昼の時間もずっと教室にいるのだが、彼女が弁当に手を付けた痕跡はなく、徐々に痩せていく姿に俺の心も削られていく。心配で心配で仕方ないのに、トイレトーパーを投げることでしか自分のアピールが出来ない不甲斐ない俺はなんて情けない男なのだろう。

本気の恋がこんなに怖いものなんて知らなかった。遊びなら簡単で肌を合わせるのだって欲望の放出にしかないのに、この小さな彼女に俺は心底怯えている。

やつれていく彼女に心痛を堪えながら俺は考えた。どうすれば彼女を元氣付けられるか考えて考えて考えて考えて、ついに一つ方法を思いついた。

後頭部にトイレットペーパーをぶつけ続けてこちらを向いてくれるのを待つのではなく、さり気無い仕草で想いを託す方法。

投げ続けたトイレットペーパーをミシン目一つのところで丁寧に千切る。

そして持っている黒のサインペンと、赤のサインペンを取り出した。

最近気がついたのだが、もしかしたらサインペンはトイレットペーパーに何か描くのに向いていないかもしれない。滲む先を利用し絵を描きながら唐突に思う。

しかしながら今手持ちの色ペンはこれしかないので、カリカリカリと手を動かした。

途中で化学の担当のスタレ禿と目が合ったが、物言いたげな様子を一睨みで黙らせる。

化学の授業より恋愛だ。恋こそが青春の醍醐味で学生の本分。昔の偉人だつて言っている。『せつなる恋の心は尊きこと神のごとし』と。

つまり今の俺の想いほど尊く高潔なものはないのであり、他に優先すべき何かなど存在しない。

何か言いたげに口を開いたスタレ禿にさらに眼光を鋭くすれば、諦めたように首を振った。

勝った、と心の中で快晴を叫びつつ手を動かす。

実は俺は絵を描くのが得意だ。デフォルメされたキャラクターやイラストは苦手だが、写実などは得意だ。見たままを描くのは楽しく、それ故に選択だけは彼女と違う授業を取っている。

ちなみに今トイレットペーパーに描いているのはミニロップの我が家の天使の『あいちゃん』だ。

俺が言うのもなんだが、うちの子は毛並みもいいし睫毛も長いし耳の垂れ具合も最高だし、もうモッフモッフのラブリーさんだ。勢い余って全力で抱きしめたくなる愛らしさで、胸のときめきは留まるところを知らない。つまり、絶世の美人さんだ。

彼女を見て心和まない存在など世界に居るはずがない。向坂藍と同じくらいに魅力的なミニロップなのだ、『あいちゃん』は。

本当は番の『あおいくん』も描いてやりたいが、生憎色ペンが足りない。似た色を購入することを胸に決めつつさかさかと手を動かす。

ああ、そうだ。俺の想いを表現するためにもう少しプラスしよう。『あいちゃん』の姿に心が和み、ついでに俺の想いも表現できる。

一石二鳥のアイデアに俺の心は一気に浮き立つ。

描く途中の『あいちゃん』の胸の部分に赤いペンでハートを描き、そこに黒ペンで矢を通す。まさしく俺の心そのものだ。

貴女に心を射抜かれてます的な。我ながら凄い表現力の絵に頷く。そうだ血も流してみよう。貴女に心を射抜かれ、振り向いてもらえない俺は心から血の涙を流しています的な。

いいアイデアだと納得し、絵の続きを描く。

これなら奥手の俺でも表現できると絵に夢中になっていると、不意に名を呼ばれた気がした。

教室が静かになり顔を上げて周りを一瞥すれば、教室の入り口に見慣れた後輩の姿があった。

「ちわーっす！佐倉先輩居ますかー？」

騒々しい声にひっそりと眉根を寄せる。

俺は目立つのは嫌いだ。それなのに俺の苛立ちを理解できない後輩は、俺を見つけるとへらりと笑った。

彼の名は小倉桂一。おくらけいち一つ下の一年生だ。

一年生にしてはでか過ぎる態度で余裕たっぷりに上級生の教室に足を踏み入れた小倉は、垂れ目と学校で唯一の肩を超える金髪を軽く結わえた姿が特徴的な男だ。

顔立ちは整い、身長も190越えをする俺より少し低い程度なので長身の部類に入る。痩身だが鍛えているので十分な筋肉が体についており、犬のようになつっこそうな雰囲気を持つがひと縄筋じゃ行かない奴でもある。

へらへらした態度で男女共に人気があるが、あいつはその笑顔のまま遠慮なく人をぶん殴るタイプだ。

入学式当日に俺に喧嘩を売ってきたので思い切り叩き潰してやったが、俺以外の奴らには全勝らしい。

入学式から三週間後、『いつかあんたを越えてみせるっす』と、一見すると人当たりのいい笑顔で宣言し、付きまといてくる面倒な奴だった。

喰えない笑顔のまま俺に一直線に向かって来た奴は、不意に足を止めると目を丸くする。

そしてへらり、と気の抜ける笑顔を浮かべると、着崩した制服のズボンに手をつ込み上半身を屈めた。

彼の視線の先には、無言で俯く向坂藍。

好奇心一杯とばかりに目を輝かせた小倉は、何の気負いもなく彼女に手を伸ばすと、その黒く艶やかな髪を一房摘んだ。

さらさらと音がしそうなくらい美しい黒髪が流れ、暫し見惚れる。

「あれー？この人、向坂先輩つすよね？佐倉先輩、同じクラスだったんすか？」

無邪気に聞こえるが、その瞳は獲物を見つけた肉食獣のような色を宿していた。

指先で摘んでいた髪を開放し、くしゃりと笑み崩れる。無邪気にも見える様子に、俺の眉間に一気に皺が刻まれた。

ゆるく口角を持ち上げ、目の前の彼女を見定めるよう顔を近づける。

我慢できたのは、そこまでだった。

「ッ」

俺が立ち上がったのを視界の端で捕らえると、一瞬だけ小倉の顔色が変わる。

だが今更遅い。すでに間合いは俺のもので、振り上げた拳は彼の鳩尾に吸い込まれるよう打衝撃を和らげるためにバックステップを踏んだのだと気付き、少し先で机を薙ぎ倒しながら床に転んだ男を睨み据えた。

腹を押さえ立ち上がれずにいるのを確認してから、動きを止めた彼女に視線をやる。

可哀想に余程怖かったのだろう。

血の気の失せた顔で唇を強張らせている彼女に、無意識に手が伸びた。

初めて触れる彼女の頭は片手で握れるほどに小さくて、黒い髪は『あいちゃん』のものよりも真っ直ぐでさらさらした感触を伝えてきた。

初めて触れた彼女に心臓が爆発するのではないかと思えるくらいに胸が高鳴る。

今なら気絶してしまえそうだと、震える吐息をゆっくりと吐き出した。

それだけでも死んでしまいそうなくらいだったのに、弾かれるように顔を上げた彼女は真っ直ぐに俺を見てきた。

僅かに潤んだ瞳に心が痛み、その涙を拭えたなら、と指先が伸びそうになる。

けれど、ぴくり、と体が震えたのを見て、代わりに小倉が触れた部分を消毒とばかりに摘んだ。

まだまだ触れたいと望む自分をやっこの思いで宥め、もう一度だけ頭に手をやると先ほど描いていたウサギの絵を置く。

『あいちゃん』の姿を見て、彼女が少しでも心慰められれば良いと、勇気付けるよう微笑んだ。

流石に俺の想いが赤裸々に描かれているそれを見たときの反応は直接見るには恥ずかしすぎ、すぐさま視線を逸らし上半身を起こした小倉に向ける。

「・・・来い」

「へ？」

きよとん、と顔を上げた小倉の首根っこを掴み強制的に引き摺っていく。

そのまま廊下に出て、人通りが無い場所まで行くと壁際に向かいぶん投げた。

背中を強かに打ちつけたらしい小倉は、息を詰めてこちらを見上げる。

愛嬌がある瞳に涙を溜めた男に、俺は嗤って教えてやった。

「言っておくが、彼女はロングも金髪も好みじゃない」

「はあ？」

「中学のとき、確かに聞いた。彼女の好みは明るすぎない茶色だ」

正確に言つと、現在の俺のような栗色の髪だ。

中学のときのインタビューで学校新聞に載っていた。

胸を張って教えてやると、ぽかんと口を開けて間拔けな表情を晒した小倉は、茶色の瞳でじっと俺を見た。

「・・・先輩、向坂先輩に惚れてんすか？」

「・・・！！？」

秘めた恋心を見抜かれた俺は、目をまん丸に見開いて鋭すぎる洞察力の後輩に言葉も発せなかった。

そうして彼女の元に届けた絵を思い出し、奥歯を咬んで表に出そうな感情をギリギリで堪えた。

呪いのトイレットペーパーの終着地点

私の名前は向坂藍。むかしばい

至って一般小市民であり、大勢に埋没するタイプの花の高校二年生である。

私は今人生の岐路に立っている。

昨日人生で初気絶してからずっと悩みに悩んで今尚悩みながらも決心をしようとしていた。

私の後頭部にトイレットペーパーの襲撃が始まってから早11日目。もう色々と限界だ。

毛根も限界だし精神的にも限界だ。昨日ついにシャンプーしているときに抜け落ちた毛が20の太台に乗った。

このままだと本当に宣教師ヘアになってしまう。それは嫌だ。

私をここまで悩ませ追い詰めている存在は、今日も私の後ろでぽこぽことトイレットペーパーを投げ続けている。

後ろを振り返るな、振り返ってはいけない。

歯を食いしばり冷や汗を流しながら私がここまで我慢するのは、彼が学校でも超有名人で関わりたくない人間ベスト3に入る人種だからだ。

彼の名前は佐倉葵。さくらあおい 今時珍しいバンカラが似合いそうな番長様である。

スキンヘッドすれすれまで刈り取られた髪の毛に、耳にじゃらじゃらと付いたピアス。ひと睨みで熊も引付を起こすんじゃないかと

思えるくらいの迫力を有する、とても同級生とは思えない少年だ。
ちなみに身長は190を超えていて、小柄な私からすれば見上げるほどの大男。

彼の二の腕が私の太もと同じくらいの太さといえ、その体格の違いも察してもらえらるだろう。

とにかく何をご乱心していらつしやるのか知らないが、番長の奇行は11日目に入っても終わらない。

クラス替えしてから一月。友達は一人もいなくとも、平和に暮らしていたあの日々が懐かしい。

思い返せば涙が零れそう。歯を食いしばり我慢しながら、自分の人生そのものを振り返ってしまう。

思えば友達と呼べる人間は数えるほども存在しないが、それなりに生きてきた。もしかすると今が一番私の短い人生で過酷な時期なのかもしれない。

ため息を零して俯けば、視界に恐ろしいものが目に入る。

それは昨日番長に頭に乘せられた、どうみても呪符。

リアルな黒ウサギの心臓に矢が突き刺さり、そこから血が滴るといふ何ともホラーな劇画調な絵だ。

家に帰って捨ててやろうと思ったが、呪われそうでは出来なかった。家族に相談しようにも、こんな絵を見せたら心配されると思い至り、部屋で徹夜してしまった。だって普通寝れないでしょう、こんな呪いのブツが置いてある部屋で。

瞼を閉じるとこの絵が脳裏に浮かび飛び起きること十数回。しかも想像の中でウサギは痛みに呻き声をあげ涙を零している。恐ろしさ増大だ。

枕元に置いたのがいけないと場所を机の上に移動させたが、妙に緊張して目が冴えたまま朝が来た。おかげで目がしばしばする。

このままでは本当に冗談じゃなく登校拒否になる。

そこで起死回生の案を私は練った。

そう、人生で一番関わりたくなかった相手に頭を下げることを決意したのだ。

自分で言うのもなんだが私はここ10日超我慢したと思う。自分のキャラクターを忘れるくらいに我慢したと思うのだ。

しかし我慢にも限度がある。

秤にかけた結果、もう背に腹は変えられないと頭の中に住むもう一人の自分が宣言したのだ。

この10日間トイレトペーパーを後頭部に投げ続けられた私は、その法則性に気付いた。

番長がトイレトペーパーを投げる頻度は統計すると一時間目と三時間目、そして六時間目に多い。

対してその手が緩むのは昼放課に入る寸前と朝と帰りのHR。

よってその魔の手から抜け出し『奴』と接触するのは、『奴』の行動を省みても昼が適切だ。

そう判断した私はぽこぽこ投げられるトイレトペーパーに拳を震わせながらも、何とか四時間目まで耐え抜いた。

そしてチャイムがなった瞬間、教師への挨拶などお山の何処かへ飛んで行けとばかりにスタートダッシュをきった。

上下する肩を宥めて、緊張に震える手を握り締める。

私が現在立っている場所は、生徒会室の前。つまり学校で一番権力を握る生徒（もしかしたら違いかもしれない）の集う場所の前にいた。

私は今から人生でもベスト3に入る苦手な相手へと接触を図ろうとしている。

深呼吸を数度繰り返し、震える手をドアへと伸ばした。

ノックを数回すると、室内から返事が返る。

ここでどうして返事が来るかは疑問に感じてはいけなない。

この学校での生徒会役員は普通より少し幅を利かせていて、彼らは特権を幾つか持っている。

授業の参加資格もその一つで、だから授業が終わったと同時にダッシュした私よりも先に　　と言うよりも予めここに居たのだ。

何故学校に友達も居ない私がそんなことを知っているかというところ、去年生徒会の勧誘を受けたからだ。

なんだかんだ言って重労働な生徒会は、甘いエサをちらつかせて役員をゲットする。私が勧誘を受けた理由は成績が第一なのだろうが、役員は割と学校で名の知れた生徒が多いらしい。

去年私を勧誘してきたのは当時の生徒会長だったが、今では代替わりしている。その代替わりした役員こそが私が生徒会役員を断った最大の理由だが、なけなしの勇気を振り絞り私はここまでやってきた。

怯える心を叱咤してドアを開ければ、12畳ほどの広さの部屋に長方形の机がコの字型に並んでいる。室内に居たのは3人。誰も彼も一応名前だけ知っている有名人だ。

そしてその中でも一際目立つ窓際のお誕生日席に座る男こそ、私

が用がある人物だった。

ベリーショートの黒髪にきりりと釣りあがった柳眉にアーモンド形の瞳。豹を思い起こさせる雰囲気の持ち主の彼は名を乙杜恭弥おともりきょうやといい、信じたくないが私と血縁関係がある生徒会長だった。

血縁関係といっても父親の妹の従兄弟の息子というだけでそこまで近いわけではないが、母親同士が仲が良かったため昔はちよくちよく顔をあわせていた。

顔立ちは私と違った勝気な顔立ちの美形で、お祭り人間でもある所為かそこそこ人気はある。

しかし、だ。

はつきり言おう。私は奴が苦手だ。

私が根暗になった根本を形成したのは奴だ。

幼稚園時代、私は奴と一緒にどちらかの親に預けられることが多かった。その当時は流石に友人も数人いたし、仲良く遊んでいることもあった。

それなのに、私が家に友達を呼んで一緒に遊ぼうと誘うと、何が嫌なのか大魔神の如く立ち塞がり、友達と一時間かけて作った大作の積み木の城をめつためたに壊された。

さらに奴の家に行った時も、奴が友達を呼んだと紹介したから仲良くしようとすれば、『おまえはこっちにくんな、ブス!!』と髪を引っ張られぼろくそにいびられた。

そんなことが続く内に二人きりで過ごすことが増えたが、それはそれで無理だった。

近づいたびに『おれによるな、ばかあ！』。離れば『なにむしてんだよ、ばかあ！』。一人で遊んでいるのを邪魔しないよう隣に座れば『なにみてんだよ、ばかあ！』。じゃあと隣に座りながら本を読み出すと、『なにおれからめをはなしてんだよ、ばかあ！』。

幼心に馬鹿はお前だと思った日を今でも簡単に思い出せる。

学区こそ違うが家が近かったので、何だかんだでお互いの家を行き来する生活は小学校を卒業するまで続いた。

中学に入れば奴が部活動に入ってくれ、その機会は正月や盆などの身内が集まる場だけに変わり、私は心底ホッとしたものだ。

そして高校に入り顔をあわせて絶望した。何故、奴の志望校を確認しておかなかったのだろうか。

私は奴の母親に聞かれて素直に志望校を答えていたのだが、まさか同じ高校に入ると思っていなかった。サッカーを得意とする彼は当然サッカーの特待で県外にでも行くと思いついていたのだ。

それでもスポーツはともかく成績は普通の彼は、文系ということもあり顔はほとんど合わない。去年も運良く1組と5組とクラスが離れほとんど会話もなかった。

最後に会話したのは、去年の正月だ。生徒会の役員になるかどうかを問われ、その気はないと断言した。

覚えている面影とほとんど変わぬ奴は、私の姿に目を丸めると、にいと口角を持ち上げる。

性質の悪い笑い方は覚えている頃のみまで、自らの選択に迷いが生まれる。

しかしポケットに入っているあの呪いのトイレットペーパーが私の脳裏から逃げることを拒否させた。

「何だ、藍。お前が俺に会いに来るなんて珍しいじゃねえか」

「・・・乙杜、向坂さんと知り合いなのか？」

「幼馴染だ、一応な。遠い親戚でもある」

「お前が？向坂さんと？全然似てないし」

「あいつは母親似。俺は父親似。んで？俺を毛嫌いしてるお前が俺に何の用だ？」

眇められた視線に身が竦む。

九年間に渡り苛められた記憶は性格を歪めるほどで、苦手意識は失っていない。

それでも背に腹は代えられない。トイレットペーパーの呪いは、もう嫌なのだ。

「生徒会の、会計のポストはまだ空いてる？」

「・・・何？お前、まさか」

「空いているのなら・・・私を、生徒会に入れてください」

一息に告げ、深々と頭を下げた。

会計の役割は計算が得意な私へと去年の生徒会長が持ちかけたポストだ。しかしメンバーを聞いた私は、会長候補が恭弥だと知り拒絶した。

生徒会の入れ替わりは去年の10月。そして普通なら変更も今年の10月だ。役員の追加も基本はなく、一年間を同じ役員が勤める。そしてうちの学校は生徒会は会長が選ばれれば、基本的に残りの役員は会長の指名制になる。私が会計のポストを断ったのは、本来なら役員を選ぶはずの恭弥の指名ではなかったから、というのも理由の一つだった。

しかし今はむしろ頭を下げてでも入れてもらいたい。都合が良いと判っているが、それでも私も他に道がないのだ。

「お前が、俺の生徒会に入るのか？」

「・・・お願い、します」

「本気か？」

「本気」

しつこい問いかけに顔を上げれば、アーモンド形の目を見開いてこちらを見詰める恭弥が居た。

真っ直ぐな視線にたじろぎながら頷くと、ぱつと顔を輝かせる。

しかしすぐにその笑顔を隠し、これ以上ないくらいに眉間に皺を寄せた。

私へ向けていた視線を逸らすと、腕を組み胸を逸らす。

「一応、まだ会計は空いてる」

「本当!？」

「お前が、どうしてもって言うなら、入れてやってもいいぞ。いいか、どうしても! って言うならだぞ!」

「どうしても」

「・・・なら、仕方ねえな! どうしてもって言うなら、入れてやらないこともない。幼馴染だし、特別だ!」

つんと顎を逸らした恭弥が初めていい奴に見えた。

トイレットペーパー地獄から開放されると思えば、あのいつ殺ら

れるかという恐怖を思えば、子供じみた恭弥の嫌がらせくらい耐え切って見せよう。

奴だって一応高校生だ。まさか小学生並の嫌がらせはしてこないはず。

ポケットに手をやり、リアルウサギの描かれたトイレットペーパーを握る。

捨てるのはまだ怖いので後で恭弥にあげてしまおうと心に決め、漸く出来た逃げ道に脱力して座り込みそうだった。

「何だ、あの乙杜のツンデレ具合」

「・・・向坂に関しては昔からああなんだ。察してやってくれ」

「てか、察する以前の感じだけだな」

そんな会話がさりげなく繰り返されていたことなど、私はまだ知らなかった。

トイレットペーパーは恋の架け橋：前編（前書き）

葵君視点です。長くなったので分けました。

トイレトペーパーは恋の架け橋：前編

俺の名前は佐倉葵。さくらあおい

県内でも進学校と呼ばれる高校に通ういたって普通の男子高校生だ。少しばかり普通と違うのは、俺が学校で番長と呼ばれていることだろう。降りかかる火の粉を遠慮なく振り払っていたただけだが、気が付けば不動の地位を確保してしまった。

そんな俺も現在は花の高校ライフを満喫している。その昔隠れオタクな悪友に押し付けられた少女マンガの登場人物のように、俺の背景には満開の花が咲き誇っている。勿論比喻表現だが、それが大袈裟ではないほど感情面において充実した生活を送っていた。

ときめきの高校生活、なんて彼女と出会う前の自分が聞いたら鼻で笑うだろうが、今の俺は恋の神様限定で信じている。

無神論者の俺に神様の存在を認めさせる切欠になった存在の名は、さきさかあい
向坂藍。

今日も極上の絹糸のような黒髪を背中に流し、真っ直ぐに背筋を伸ばす姿は、小柄な身長であるが凛として美しい。

前後する席のおかげで顔は見えないが、どうせ隣になっても緊張して顔を覗き込むなど出来ない。

小心者の俺には背筋が伸びた姿を後ろから思う存分窺える背後の席がピッタリだ。

一日中でも見ていたい。むしろ一年中でも一生涯でもいい。机に頬杖を付いて考えるのは目の前の彼女の存在だけで、授業する

教師の声など右から左へ抜けていく。

特進クラスで居るために最低限の勉強を欠かすつもりはないが、それは家ですればいい。

学校は学生生活を満喫する場だ。すなわち恋愛を優先すべきだ。

それこそが自分の青春。まさしく人生の熟す前の青い果実を満喫している。

だが心の花が満開だったのはつい先日まで。

今の俺の心は、薔薇が七分咲き程度の勢威しかない。

彼女へのアピールを始めてから11日。俺には日が経つにつれ少しずつ心の闇が生まれてきた。

ポコン、ポコンと彼女の後頭部狙いでトイレットペーパーを投げながら首を傾げる。

黒髪に覆われていない肩が、痩せた気がした。

元々出る場所は出ているのに華奢で細い印象の彼女だが、最近になって益々痩せた。

毎日昼も食えずにずっと俯いているのだが、やはり病気にでもなってしまったのだろうか。

心配で仕方なくて俺も昼は食べれないが、夜をきっちり摂っている所為か俺は太った。

最近喧嘩を売られることも少なくなり運動していないお陰だろうが、大柄な俺は体を維持するためにも食欲旺盛だ。

燃費がいいのか悪いのか判らないと言われる俺の食欲を少しでも分けられればいいのに。

それにしてもこれ以上体重が増えるようならシェイプアップしなければならぬ。

油断ならない後輩の小倉でも誘って軽く汗でも流さねば、太り過ぎだと彼女に嫌われてしまう。

切ない想いに胸を焦がしつつトイレットペーパーを後頭部に投げ続

ける。

昨日『あいちゃん』の絵を描いてから思い立って購入した色ペン。だが十色ペンで綴った想いは今日も報われずに床へと落ちていく。そう言えば一度も片付けたことがないのであれだが、翌日になると消えているトレットペーパー郡は何処に行っているのだろう。

僅かばかりの疑問が脳裏を過ぎり、それどころではないと首を振る。今は徐々に痩せていつている向坂藍についての心配が先だ。

まさか、と思うが彼女の食欲が減退した理由は俺と同じなのだろうか。

クールで冷静な彼女の姿から考えてもいなかったが、もし、自分と同じように恋煩いでご飯も喉を通らないのだとすれば、俺はいったいどうすればいいのだろう。

全く考えていなかった想像に、今の時点では推測でしかないのに泣きそうになる。

その容姿と何処から見てもパーフェクトな存在故に彼女に想い焦がれる男が多数存在するのは知っていたが、彼女が誰かを好きになるなんて考えたこともなかった。

皐月の風のように涼やかで爽やかな空気の彼女は、まるで純白の雪のように踏みにじられない穢れないもので、それが別の色に染まるなど想像もしてなかったのに。

込み上げる感情を奥歯を食いしばることでぐっと堪える。

まだ希望は捨ててはいけない。そう、まだ希望は残っている。

何故なら俺は朝見かけたのだ。彼女の机の端に、昨日手渡した『あいちゃん』の絵が置かれているのを。

机に辛うじて乗っているそれを見た瞬間、ぐあつと赤くなりそうな顔を気合で押し込めた俺は凄いと思う。

本気で頑張った。喧嘩で骨を折ったときなどと比べ物にならない気力が必要だったが、頑張ったので僅かに口元が引きつっただけだ。

まさか赤裸々の想いを机に飾られるとは考えてもなかったのだけれど、怒るという選択肢もなく、むしろ学校までずっと手放さず持つていてくれたのだと嬉しい。

いきなり感情を押し付けられ、最悪捨てられるかもしれないと思っていたのだ。

そこまで回想し、俺ははっとした。

まさか、向坂藍が考えているのは俺のことだろうか。

最近徐々に痩せていつてるのは、彼女が俺を想ってご飯も喉を通らないとか、そんな理由なのだろうか。

果てしなく自分に都合がいい妄想だが、もしそうならばと歓喜が胸の奥から競りあがる。

あまりと言えばあまりの興奮にトイレットペーパーのコントロールを誤り、向坂藍の斜め前方の男に当たった。

突然のことに大袈裟に体を震わせた男は後頭部を抑えきよるきよると視線を彷徨わせ、机の上のトイレットペーパーに動きを止める。

そつと手に取り恐る恐る振り返ってきたので、全力で睨みを利かせた。

それは貴様に向けた思いじゃねえんだよ。むしろ触れるだけで万死に値するんだよ。

てか俺の全力の恋心を素手で鷲掴みって何様だ、コルあ。

俺の持つ感情の中で唯一純粋な部分を汚い手で握るってどんな見だ、殺すぞ。

ギンギンに睨みつけると、涙目になりトイレットペーパーを持っていた手が震えた。

ロマンスの神様の悪戯か、それは放物線を描いて向坂藍の机の上に落ちる。

先ほどの憎しみも薄らぎ、図らずもグッジョブ、と親指を立ててウ

インクすれば白目を剥いて机に突っ伏した。
虚弱体質な男だと思いながら、視線を前の彼女に向ける。

だが考え事でもしているのか彼女はピクリとも反応しなかった。
始めこそ一々反応を返してくれていたが、最近はややマンネリ化している気もする。

そろそろ『落し物拾って大作戦』も終わり時だろうか。

けれど彼女が個として俺を見てくれたあの瞬間を想うと、このトイレトペーパーは手放せない。

もう願掛けのようなものだ。

なんかこのトイレトペーパー作戦ならいける気がするのだ。

俺と彼女の架け橋となり、純白の道を繋げてくれる気がするのだ。

いつも通りにぽんぽんと後頭部にトイレトペーパーを投げていた俺は、なんとなく時計を見上げて昼食の時間が近づいているのに気がついた。

今日も彼女は食事を取らずにじっと席に座り机を眺めているのだろうか。

それが例え俺を想ったのことだとしても、儚げな姿は目に余る。
どうしたものかと思案し、俺はいい案を思いついた。

昨日購入した色ペンの中から茶色と黒を取り出すと、ミシン目一つ
のところで切り取り絵を描き始める。

言葉で通じないことでも絵なら想いは通じるはずだ。

早く元気になって欲しくて、食欲を取り戻して欲しくて、俺は机にかじりついて残りの時間で精一杯の絵を描こうと手を動かす。

体を癒すなら天使がいいだろう。

かきかきと脳裏に浮かんだイメージのままペンを滑らせる。

迷った末に結局サインペンにしたのだが、この滲みも慣れてきたの

で絵が上達してきた。

以前見た宗教画だと天使はわつかと羽が生えて真っ裸だった。

人体を模していれば色々な面で手渡せないが、幸い『あおいくん』はミニロップ。裸でも毛が生えているので問題ない。

まず中心に『あおいくん』を鎮座させ羽と輪を描く。

そこで俺は気がついてしまった。

天使の癒しの力はどうのように放出されるか全く知らないというのを。

そもそも天使に癒しのイメージがあるが、具体的にどんな感じに癒すのか。

体から光を放出させるとも言うのだろうか。

それとも手を添えて体に力を注入するのだろうか。

残り時間五分で描き始めたので昼間で時間がないのに、こんなところで詰まってしまった。

考える、考える俺。

俺の絵に彼女の元気が掛かっているんだ。捻り出せ俺。

悩んで悩んで悩み抜いたが、結局結論は秒針が十も進まない内に出た。

俺が『あおいくん』に癒されてる、と一番思える瞬間を表現すればいいのだ。

ちなみに俺は『あおいくん』を抱き上げた瞬間、くりくりとした眼にじっと見詰められる瞬間に癒しを感じる。

感情豊かで純真で真っ直ぐな瞳は俺の心を掴んで離さない。

つまり瞳から癒しオーラを出せばいいのだ。

結論が出れば行動は早い。

色ペンの中から黄色を取り出すと点描画の要領で幾つも細かく点を打つ。

光り輝く陰影を描写したいのだが、サインペンの先が太すぎどうに

も上手く表現できない。

どうしたものかと悩みつつそれでも頑張っていると、無常にもチャイムが鳴り響いた。

そして同時にがらりと椅子を引く音が教室に響く。

間近で聞こえた音に驚き顔を上げると、まだ授業終了の合図も出てないのに向坂藍が立っていた。

こんな行動初めてでいったいどうしてしまったのかと目を丸くする。どうやら彼女の行動に疑問を持ったのは俺だけではないようで、クラス中の視線が彼女に突き刺さった。

何をするのかと息を詰めて見守っていると、ふわり、と目の前でスカートが揺れる。

うちの学校の女子の制服はセーラー服だ。襟には白いボーダーが入り、胸元に結ぶリボンが赤と、昔の良き時代を髣髴とさせるそれは限りなく黒に近い紺色がベースになっている。

この学校で彼女ほどセーラー服が似合う女は居ないと、翻るプリーツスカートに見惚れ俺はうっかりと行動が遅れた。

決してスカートが翻った隙間から覗く白い足に釘付けになったわけじゃない。柔らかく滑らかな肌に触ってみたいと不純な想いを抱いて出遅れたんじゃない。

気がつけば彼女の姿は教室から消え、室内は水を打ったように静かになった。

クラスメイト、教師も含み呆然とすること三分。我に返った俺は、のそりと立ち上がり教師を睨んだ。

「・・・早く終れ」

悪友に変な部分で真面目と言われた俺は、授業をサボることはあつても参加した授業は必ず挨拶をしないと落ち着かない小心者だった。

トイレトペーパーは恋の架け橋：後編

あつという間に過ぎ去る時間に、ふうと重いため息を吐き出す。目の前の席は空いたままで手には描き終えた『あおいくん』の肖像画。天使をイメージしただけありどこか神々しい雰囲気のは、自分でも中々の傑作品だったので是非とも見て欲しかったのに。

机に肘をついて掌に顎を乗せる。

普段ならこの体勢で前に居る彼女の背中を見詰めつつトイレトペーパーを投げるのが日課なのに、昼時間から帰ってこないお陰で化学の禿の顔が見える。

横にすだれてる髪を未練がましくポマードでがちがちに塗り固めてる往生際の悪さを見ると、イラつときて筆取りたい衝動に駆られるがそんな気力も沸かず代わりにもう一度ため息を吐いた。

目の前のぼつりと空いた席がもの悲しい。

あの時追いかければ良かったと思ったときは時遅し、俊足の彼女の姿は何処にも見えず教室で待っても帰ってこなかった。

二年生になって登校するたびに目にした背中がなくなるなど違和感を感じてしまう。

自分がサボるならともかく、真面目な彼女が授業をサボるなど信じられなかった。

となると考えられるのは何らかの不確定要素により授業に参加できなくなったということだが、まさか学内で危険があるとも思えない体調が悪くて早退したのだろうか。それともまた保健室で横になっているのだろうか。

もしかして向坂藍は体が弱いのだろうか。

大いに有り得る想像に、どうして今まで気がつかなかったのかと悔

やみながら机をぶん殴る。

何故今までその可能性を考えなかったのか。
迂闊過ぎる自分に奥歯を噛んで激しい感情の揺れを堪えた。

向坂藍は二年生全体で考えても前から数えた方が早いだろうと思えるくらい身長が低い。

そして見るからに体重は軽く、スタイルはいいが風が吹けば飛んで行きそうな勢いで華奢だ。

俺が手首を掴んだら一回り半は余裕で出来そうな細い体で、クールだが淑やかで大人しい。

運動神経抜群で体育の授業でも伸びやかに動き回っているから気がつかなかった。

先週から男女合同でバレーの授業だが、全身のバネを使って伸び上がりながら打つスパイクは素晴らしい。

あの身長でスパイクを打つなど普通なら無理だろうに、まるで背中に羽が生えているのではないかと思った。

ちなみに男女合同とは言ってもきつちりとコートは二面に分けられているので、俺は彼女と同じチームに参加できない。

変わりにちらりと見えた頃とか、細く白い足に見惚れた輩にバレーで鉄槌を下しておいた。

俺も運動は苦手じゃないので顔面狙いのスパイクはほぼ命中。

その際ちらりと隣のコートを見たとき、俺がスパイクを決めた瞬間を彼女が見ていてくれて嬉しくてひっそりと笑ってしまった。

思えばあの時も顔色が悪かった気がする。

きっとチームメイトに迷惑をかけると思って、体調が悪いのを我慢していたのだろう。

考えれば考えるほど嫌な方向に想像が働き、こうしてはいられないと席を立つ。

黒板に文字を書いていた禿が大袈裟に体をびくつかせ、ゆっくりと

こちらを振り返った。

「・・・気分が悪いんで早退します」

返事を待たずに教室を出ると、保健室に向けてダッシュした。

保健室に入ると保険医は留守中だったらしく、そのままカーテンで仕切られている一角を見つけそろそろと近づく。
そして気を使いながらそつと顔を覗かせ、そこにある顔を認めた瞬間に無駄な気遣いをした自分に苛立った。

「・・・なんでデメエがここに居る？ああん？」

だらしなく爆睡する男の襟首をぐつと掴み持ち上げると、遠慮なくがくがくと前後に振ってやる。

途中で悲鳴か奇声を上げていたが完全に無視だ。

彼女を見つけたと思った瞬間の喜びを返せ。

こっそりと寝顔が見れるかもと喜んだ気持ちを返せ。

壊れかけの人形のように首をがつくんがつくと揺らす男を乱暴にベッドに投げ捨てると、変な体勢で落ちた所為でうめき声を上げて蹲った。

「いつてえー、何だ？何が起こった？どうしたんだ、俺？」

「こんなところでグーグー寝てんじゃねえよ。今は授業中だろうが」

「あれ？お前佐倉じゃん。何してんのこんなところで？授業は？」

「サボった」

「どうして？」

「彼女が虚弱体質で倒れているかと思ったからだ」

「彼女？ ああ、向坂藍か。そいや今年は同じクラスなんだっ
たな」

がりがりと自前の栗色の髪を掻きながら身を起こした男は、中学時代からの腐れ縁の悪友、木戸竜也きど りゅうでだった。

垂れ目がちな瞳をしょぼしょぼと眠そうに瞬きしながら大あくびした木戸の頭をぶん殴る。

頭を押さえて悶絶した彼は、涙目になりながら睨んできた。

「いつてえな！何だよお前さつきから」

「彼女は何処だ？」

「向坂？ここには居ないだろ」

「居ない？だが体が弱い彼女は保健室に来たはずだ。そうじゃなければ今頃授業を受けているだろう？」

「はあ？向坂藍の体が弱い？そんな噂聞いたことないぞ？」

「噂にならないのも当然だ。俺とてさつき気がついたばかりだからな。彼女を見つけ出し、俺が作った体調回復祈願の想いを籠めたこれを渡さねば」

「何それ？」

「『ああいくん』の絵だ。俺が世の中で彼女の次に癒される我が家のアイドル、ミニロップだ」

「ああ・・・あのウサギか。確かに可愛いよなー。お前絵だけは上

手いし、アピールにはいいんじゃない？見せてみるよ」

「・・・仕方ないな」

いいアピール方法だと褒められたので渋々握り締めていたトイレットペーパーを渡す。

だが俺が丹精籠めて描いた絵を見た瞬間、木戸は鮮やかに動きを止めた。

指先で摘んだトイレットペーパーに目を丸め、真っ青になり汗を掻く。

もしかこいつが保健室に居たのもあながちサボリではなかったのだろうか。

だとしたら悪かったと思わないこともない。ミジンコの心臓並みに罪悪感が沸く。

「どうだ？」

「どうだって・・・お前向坂が好きなんだよな？嫌いとか憎んでるとか呪ってやりたいとかそんな感情は持ってないんだよな？」

「何を今更」

問われて頬が熱くなる。

どう考えても今の俺は真っ赤になっているだろうから、照れている様を見られないようそっと俯いた。

俺の片思い暦は三年と長い方だが、やはり面と向かって誰かに想いを吐露するなど恥ずかしい。

軽々しく好きと口に出来る奴も居るだろうが、奥手の俺には明らかに無理だ。

そりや向坂藍は可愛いし美人だし頭良いし運動神経抜群だし大よそ欠点など見つけない片思いの相手だが、それとこれとは別だ。こうノリや勢いがないければ想いを赤裸々に告げられるはずがない。そうでなければ長々と三年も片思いしていないし、とうに度胸よく告白している。

「つつーかもじもじするな気持ち悪い。お前の見た目で照れて恥じ入るとかアウトだから。無理、純粹に女の子が好きなのは受け入れられない」

「んだとコラア！俺だつて恥じりたい時くらいあるんだよ！好きな相手の話題とかこつぱずかしいもんだろうが！テメエみたいに吹けば飛ぶような薄っぺらい人間性してねえんだよ！奥手を馬鹿にするな！」

「奥手を馬鹿にしてんじゃない。お前を馬鹿にしてるんだ」

「喧嘩売ってるのか？ 買っぞ？ 三倍にしてきつちり支払ってやるぞ？」

「・・・そうじゃなくてさ、だからお前は向坂藍が好きなんだよな」

「当然だ」

「好きな相手にこれ？このウサギ目からビーム出てるぞ？羽は生えてわっかもあるし、どっかに昇天しようとしてるぞ？今まさに召される瞬間？それとも今まさに滅する瞬間？」

「阿呆。これだから芸術的センスのない男は……。これはな、俺の『あおいくん』が天使になり癒しのオーラを放出しているさまを描いたものだ。見ろ、この神々しいまでの『あおいくん』の羽ばたきを。点描を利用した癒しのオーラなんて特に手間が掛かった部分だ」

「
・
・
・
・
・
・
佐倉」

「ん？」

「今度また少女マンガを貸してやるから、もう一度勉強しなおして来い」

ぽんと肩を叩く悪友は、どこか疲れたように重いため息を吐き出した。

彼の妹が恋愛バイブルとして愛読している少女マンガは中々面白いが、どうしてもいきなりその話題になったのか。

首を捻る俺にトイレットペーパーを返すと、彼は芋虫のように布団に包まり背を向けた。

結局その日一日向坂藍が教室に戻ることはなく、俺は不安と心配で胃が痛くなる思いをしながら帰路についた。

明日には絶対にこの絵を渡そう。

少しでも彼女が元気になってくれるよう、俺も及ばずながら協力せねば。

普段より重たく感じる体を引き摺り家に帰った俺は、トイレットペーパーのあまりが鞆に入ってるのを見て驚いた。

彼女にアピールを始めてから、トイレットペーパーが芯に残ったままなど、初めての経験だった。

木戸君の憂鬱（前書き）

親友の彼視点です。

木戸君の憂鬱

俺の名前は木戸竜也。きどりゅうや

今をときめく青春真っ只中の少年だ。ちなみに頭に美と付くことが多いが、美少年というよりは美青年の方がより正しい表現だろう。何しろ俺の身長は180cmに背が届くほどであり、華奢な印象も与えない体つきをしている。

痩身であるが鍛えているし、痩せすぎの印象も儂げな様子も欠片もない。

垂れ目がちな瞳に栗色の髪。来るもの拒まず、去るもの追わず。余裕のあるスタイルを崩さないのが俺のスタンスだ。

広く浅くを人付き合いのモットーにしている俺だが、親友とも悪友とも呼べる存在も一応居たりする。

中学時代からの付き合いの腐れ縁だが、見た目も雰囲気も俺とは百八十度正反対の位置に居る、学校で番長と呼ばれる存在だった。した。

ちなみにそいつの名前は佐倉葵。さくらあおい

名前だけ聞くと何となく可憐な美少女を想像してしまいそうだったが、どうしてコイツにそんな名前を与えたんだお前の両親と聞きたくなるほど名前負け、いや、ある意味名前勝ちしている男だ。

太く短い首に、悪役プロレスラー顔負けの強面、ガタイよすぎる体型に鋭すぎる目つき。

明らかに只者じゃないオーラを出している彼は、意外にも割りと純情で天然だ。

どれくらい天然かと言うと、恋の相談がしたいと家に突然押しか

けてきて、俺の小学五年生の妹に恋愛バイブルとして押し付けられた少女漫画を読み込みダダ泣きするほど純情で、一目惚れした相手に対し明らかに間違ったアプローチをするほど天然だ。

先ほど授業をサボり保健室で昼寝していた時に見せ付けられたブツは、俺の人生で新しい何かを生み出してしまいそうなくらい衝撃だった。

何を考えたのかトイレットペーパーの切れ端に描かれた劇画調のリアルなミニロップ。

その絵に描かれたウサギを良く知る俺は、絵の上手さには素直に感嘆した。だが、表現は恐ろしすぎた。

実にリアルなウサギはギンギンに瞳を開き、黄色の光線を一直線に放っていた。

黄色のペンで点描画の要領で描かれていたが、あれはオーラというには存在感がありすぎる。

羽と天使の輪（本人曰く）を詠えた姿はどう見ても彼が言うほどの癒しは与えられない。

むしろ残忍なまでの恐怖を与え、手渡されたら俺なら呪われたと思うだろう。

というか、あれと同じ空間で眠れない。寝たいとも思えない。かと言って捨てるのも恐ろしく、恐怖に魘され睡眠不足になるだろう。

もう何処をどう突っ込んでいいか判らない彼は、今現在俺の傍らで仕事をこなす美少女に三年間も片想いをしていた。

真っ黒で艶やかな髪を腰まで伸ばし、物静かでありながら独特の存在感を放つ彼女の名前は向坂藍。こきさかあい

俺も同じ中学だったので彼女をある程度知っているが、彼女は俺を知らないだろう。

隣のクラスで何度か姿を見かけたが、いつだって視線が絡んだことはない。

俺もある程度有名だったが、噂を齒牙に掛けない彼女はきつと興味すら持ってない。

事実隣で仕事をしていても最低限の会話しかなく、淡々と無表情で数字を合わせていた。

前生徒会長は彼女の数学能力に目をつけて何度もスカウトしていたというが、今まで会計を兼任していた俺から見てもその能力は素晴らしいとしか言いようがない。

出来ないことは何もないのではないか、と言われた完璧少女は、傍で見て実際にその印象を強めた。

オニキスの瞳の周りは長い睫毛が縁取り、清楚で着物が似合いそうな美少女は、電卓を叩く指を止めない。

どれだけ見詰めてもちらりとも意識を向けてくれない。

その様子に、ちくり、と胸の奥が痛む。

いつの頃からか与えられる痛みに、俺は深いため息を吐き出した。

悪友が彼女に惚れたのは三年前。

そして彼の想いに釣られるように、俺が自分の感情に気付いたのは二年前。

逢うたびに無理やり話を聞かされ、何か情報がないかと尋ねられ、たまに見かける姿を追う内に、ミイラ取りはミイラになっていた。

ありえないくらい最悪なパターンだ。

親友とも呼べる相手が好きになった少女に、横恋慕するなど馬鹿馬鹿しくて口にも出来ない。

応援すると背中を叩きながら、それでも失敗してしまえ、と心のどこかで考えてしまっている。

さっきのトイレットペーパーに描かれた悪魔も、その瞬間に正確に指摘してやればよかったのに出来なかったのは奪われたくなかったからだ。

自分のものにならなくてもいい。けれど、誰のものにもならないで欲しい。

どうしようもない愚考に、机に肘を突いてもう一度ため息を吐き出した。

彼がどれだけ彼女を好きか、一番近くで聞かされていたから誰より知っている。

きつとその想いは俺なんかより遙かに深くて、そしてずっと純粹だ。

方向性は間違ってるが、俺の小学生の妹にまで少女漫画を借りて内容に大泣きしながらも好かれようと努力する姿には感服する。

だから、この想いは気のせいになくてはいけない。

所詮この想いはまがい物。親友の熱が移ったような気になっていくだけ。

憂鬱な気分で机に懷いていると、不意に横から視線を感じた。

チラリと視線だけ向けると、表情こそ変えないものの小首を傾げて不思議そうにこちらを観察する向坂がいて、らしくないが敬謙な信者のように神に祈りたくなる。

どうか、心の天秤が傾いてしまう前に、俺の前から彼女を連れ去ってください

微塵も信心深くない自分の願いを神様が受け入れてくれるかは、

分の悪い賭けかもしれない。

トイレトペーパーの呪いの効能

私の名前は向坂藍。さきさかあい

至って一般小市民であり、大勢に埋没するタイプの花の高校二年生である。

私にはつい昨日まで頭を悩ませるすさまじい悩みがあった。それは、後ろの席の番長さくじあおいが関係している。

彼の名前は佐倉葵。最近ではもう私には彼のキャラクター性は判らない。ただ判るのは、ひと睨みで熊も引付を起こすだろっ鋭すぎる三白眼に、長身の男子を吹っ飛ばす腕力の威力、あと節分の鬼の役をやって保育園に行ったとしたら園児が気絶するだろっと思像する程度だ。

基本的に友達が居ない私は、他人とのコミュニケーションをとるのは苦手だ。中学になり引越すまで近所に住んでいた私を溺愛してくれた母方の親戚は感情が豊かだと言ってくれたが、父方の遠い血縁関係の幼馴染には無表情すぎて不気味だと子供の頃から言われ続けた。

何かと言うと絡んでくる幼馴染に柳眉を吊り上げた母方の親戚が笑顔で『俺の可愛い藍を貶すなんて信じられないねえ。ちよつと説得してくるよ』といきなりバッドに釘を打ちつけ始めたのも、今ではいい思い出だ。

柔らかな笑顔を保ちつつ花束の真ん中に釘つきのバッドを差し入れて一体何をしたのか謎だが、幼馴染の口から語られることもない。ただ翌日から暫くの間、随分と恭しく扱われたのを覚えている。

ああ、違う。今は恭弥のことなんてどうでもいい。

問題は私にコミュニケーション能力が不足している部分にある。長らくクラスメイトからも遠巻きにされ続けた私は、他人の感情の機微に鈍い部分がある。表情筋だって怒ったり笑ったりしていないからあまり動かないし、寝起きでぼうつとしていたら顔を真っ赤にした恭弥に不気味だと叫ばれた。

今まで友達が出来なかったのだってどうやって話しかければいいか判らなかつたからだし、嫌になるほど自分の不器用さは自覚している。

しかしながら私は問いたい。

神様、彼の行動の意味が理解できないのは、私の能力不足の所為ですか、と。

小説や漫画、ドラマや映画。学園ものと呼ばれるジャンルのものを幾つも見てきたが、後頭部にトイレットペーパーを投げられる人間なんて見たことないし、投げ続ける人間も見なかった。

道行く人間に聞いてみても、トイレットペーパーを授業中絶えず投げ続ける人間とコミュニケーション取れますかと言われても、イエスと答えられる人間は何割居るのだろうか。

私の予想では百人聞いて一人いるかいなかだと思う。

そしてあのトイレットペーパーに描かれた呪われた絵を見たら、その一人も消滅するに違いない。

長いわけではないが今までの人生を平穩に生きてきたと思っている。

根暗だがいきなり奇声を上げて走り出すわけでもないし、不器量でも他人のお目汚しをしないようにひっそりと生きている。これといって特別な才能はないが、誰かに迷惑をかけすぎる生き方はしていない。はずだ。

クラスの片隅で存在するだけならいじめにもあつていなかったし、このまま地味な人生を過ごしていくのだと思い込んでいた。

なのに蓋を開けてびっくりだ。新しいクラスになり心機一転、今年こそ変わろうと気合を入れていた最中に、まさかクラスメイトから、しかも学校中どこか近隣の不良まで恐れる番長から呪いを受けようなんて誰が想像できるか？否、誰も想像出来るはずがない。それこそお天道様でも判るまいという奴だ。

トイレトペーパーを投げ続ける奇行の挙句、頭に置かれた呪いのペーパー。あれは彼が手書きしたのだろうか。だとすれば技術力は凄いが、神様も文字通り罪な才能を授けたものだと思う。

喧嘩上等とばかりの鋭すぎる三白眼や、立派過ぎる体型、さらに進学校である高校で上位をとる頭脳に併せて人を呪う才能。

いや、良く考えるんだ私。曲がりなりにも神様が人間にそんな能力を与えるだろうか。神様の祝福を受けた人間って言うより、むしろ悪魔の洗礼の方がしっくりくる。冗談のつもりだったのに、何処から何処までを冗談として考えていたのか判らなくなり、怖くなってきたので考えるのを止めた。

とにかく受け取った呪いのペーパーは昨日恭弥の鞆に潜ませて置いたから、何か不幸が起こるとしても恭弥からだろう。心臓から血を流す憐れな兎は彼にどんな影響を与えているのだろうか。

まさかいきなり髪の毛が全部なくなったりしないだろうが、そうなったら憐れすぎる。後頭部狙いが本気で髪の毛の消失を狙っているのだとしたら、私は恭弥にお詫びに鬘を作ってあげよう。それが駄目なら額に六つの点でも書いてやる。どっかの漫画のキャラクターみたいで自然な感じだ。幸いにして顔はいいからきつと剃髪も似合うだろう。

ついでに子供の頃の怨みも晴らせて一石二鳥だ。精々ファンの女

の子に嘆かれるがいい。

トイレットペーパーを後頭部に投げ続ける番長の考えは全く理解できないが、それでも私には逃げ場所が出来た。いつそ引きこもり生活をしてやろうとまで考えたが、正式に生徒会になれば公認で授業をエスケープできる。成績の維持は必須だが、これで後頭部の襲来を免れるなら安いものだ。

つらつらと考えている内に学校に着き、下駄箱の蓋を開けた。

登校時間は帰宅部にしては早い私は、朝練をしている青少年たちの声をBGMに靴を履き替え　　ようとして固まった。

学校用のスリッパの上に、見慣れない封筒が置いてある。

桃色の便箋にワンポイントの黒鬼のシール。随分とファンシーなそれに息を止める。一昔前の漫画でよく読んだ光景だが、経験するのは初めてだ。

経験はないが、もしかしてこれはラブレターというものだろうか。

年頃の乙女らしい淡い期待に胸を高鳴らせ、学校用のスリッパの上からそつと手に取る。裏返しても差出人の名前はなく、頬を赤らめながら丁寧にシールを剥がした。

昨日の帰宅時にはなかったので、私が帰った後から、今日の登校前までに入れておいた計算になる。

こんな可愛らしい封筒を使う男子など想像できないが、まさか不幸の手紙ではないはずだ。小学校時代に一斉を風靡したそれは、学校中に回っても私の元には届かなかった。それくらい人との付き合い合いない私に、今更それはない。

とすると、やはり恋文と考えるのが妥当だろう。

自然と緩む口元を気合で堪えながら、中に入っているものに手を

伸ばす。

手先に触れたなんともいえない感触に、ん？と慌てて封筒を広げて覗き込み固まった。

眼が合ってしまった。

どうしてか知れないが、観音開きになっていた封筒の中身は、とんでもなくおどろおどろしい物体だった。

オレンジがかった毛並みの劇画調兎が、ぎょろりと大きなブラウンの瞳でこちらを見ていた。実にリアルに丁寧に描かれている。今にも動き出しそうな躍動感を感じさせる作品だが、これは空想上の生き物だろう。

だって、兎なのに目からビームが出てる。ビームが出てる上に羽が生えていて、頭には光輪まである。しかも何か臭っているのか、体中から黄色いものが出ていた。黄色で表現されるのは大体が異臭だが、彼だか彼女だか判らないこの生き物は、どんな臭いを漂わせているのだろうか。

もしかして悪魔の使いか何かだろうか。今まさに天に召されようとしているのか、それとも異界から召喚されたのか全くわからない。芸術的センスがない私だから理解できないのだろうか。いや、これはそんな生ぬるいものではない気がする。

だらだらと額から汗が流れ、呼吸と鼓動が早くなる。

つい先日、これと良く似たものを受け取った気がした。異常に劇画調の兎の絵を、徒ならぬ人物から頭に置かれた気がした。

ぎざぎざと音が聞こえそうなきこちない仕草で周囲を窺い、冗談じやなく息が止まる。

素早い動きで隠れたが、その巨体のはみ出ている。ちらりと見える制服と、半分以上が出ている顔。ぎらぎらと輝く三白眼を細めて獲物を狙う猛獣のようにこちらを睨みつけていた。

大きな手が下駄箱の端を力強く握っているお陰で、めきめきとした破壊音が聞こえ、冷や汗の勢いが増す。確かあの場所は相沢君だが、相田君だかの下駄箱だったと思うが、もう今日は開けられないだろう。彼らは職員室でスリッパを借りるしかない。

いや、それはどうでもいい。むしろ今は自分の命の心配だ。殺られる。これは絶対に殺される。だってそんな目をしてる。血走って充血してる。唇なんか噛み締めすぎて血が出てるし、未だに下駄箱はめきめきいつている。

もしかして、私が彼から渡された例の物を恭弥に押し付けたのがばれたのだろうか。だからあんなに血管ぶちぎれそうな勢いで怒り狂ってるのだろうか。

恐ろしさからまたぎこちない動きで俯いた私に、自然とトイレットペーパーに描かれた絵が入る。震える手で上手く掴めず下に落ちたトイレットペーパーには、兎の絵以外にも何かが書かれていた。

両目1・2を誇る私の視界に、しっかりとそれは焼き付く。

真っ赤な文字でただ一言。『生きる』と書いてあった。

静かな玄関に野球部（多分）の『ラスト、一本！』との掛け声がBGM代わりに響く中、私の意識は徐々にブラックアウトしていく。

『生きる』って何、『生きる』って。どういう意味？何か生命的な危機が近づいてるの？むしろあなたの呪いに気をつけるって忠告？本人なのに？と頭のどこかが冷静に突っ込む中、このまま行ったら頭蓋骨陥没かもしれないと馬鹿みたい考える。

これはもしかして、あの呪いのトイレットペーパーの効果かと、
うっかり押し付けてしまった幼馴染を初めて心から心配した。

視界から景色が消えたと思った瞬間、甲高い悲鳴が聞こえた気が
したが、きっと気のせいに決まっている。

トイレトペーパーに『あい』 注入！（前書き）

葵君視点です。流血表現あります。

トイレトペーパーに『あい』 注入！

俺の名前は佐倉葵。さくらあおい

県内でも進学校と呼ばれる高校に通ういたって普通の男子高校生だ。少しばかり普通と違うのは、俺が学校で番長と呼ばれていることだろうか。降りかかる火の粉を遠慮なく振り払っていたただけだが、気が付けば不動の地位を確保してしまった。

無駄に大振りなフォームで殴りかかってくる雑魚を最小限の動きで避け、カウンターのパンチを顎に叩き込む俺は、現在呼び出しの真っ最中だ。それも可愛らしい女の子なんてことはなく、近隣の不良校のなんたらかんたら言う同級生。同じ中学出身で、中学時代もなにかと絡まれたが高校に入ってから頻度が上がっている気がした。それでも全く興味が持てない俺は、奴の名前すら知らない。

大体今時真っ赤に染めた髪をリーゼントにするとか、どんなセンスだ。高校学ランだからとボントンを穿き、長ランは中が赤地で上り龍の刺繍がしてある。金系銀系で繊細に縫われたそれには一言。『夜露死苦』と入ってるが、誰に何を『夜露死苦』したいのか一切理解できない。むしろそんなに夜露死苦したいなら、せめて背中に縫い付けると倒れてるところを髪を引っつかんで忠告してやったら顔面に唾を吐きかけられた。思わず道路に叩きつけてしまったが、この場合俺は悪くないだろう。額が割れ鼻血も止まらないようだが、自業自得だ。

隣で暴れていた小倉も片をつけたらしく、いつもどおりの喰えな

いへらへら笑いで近づいてくる。にやけた面を眺めていると、つくづく今日は厄日だと深いため息を漏らした。

厄介ごとに巻き込まれているが、俺は別に喧嘩が好きなのじゃない。降りかかる火の粉を払っていたら気がつけば強くなっていただけの、あだ名が『番長』の一般人だ。不良を自称した記憶もなければ、喧嘩以外の何かに手をつけた記憶もない。あえて言えば髪を染めるくらいだが、高校生にもなればこの程度で非行と呼ぶ人間も居ないだろう。

自分で言うのもなんだが意外と文学を愛し、芸術を愛するユニークな性格をしていると思う。事実特技は絵を描くことで、これは唯一求愛に応用するほどの自信を持っていた。

何しろ、俺はこの絵で片想いの彼女の意識を惹き付けるのに成功したのだ。奥手で恥ずかしがりやな俺の精一杯のアピール方法だが、絶対に間違っていないと自信がある。

特に端整箆めて描いた飼うサギの絵は絶品だ。誰が見ても俺の可愛い愛ウサギとひと目で判るほど写実的だと思う。少しばかり手を加えれば一気に幻想的な雰囲気が増し、我ながら見事な作品が出来る。

今日も今日とて出来上がった自慢の作品を悪友の家に居る師匠に見せようと学校から帰宅中、たまたま近道しようと通った裏道で喧嘩中の小倉と遭遇し、たまたまその相手が中学時代の知り合いで因縁をつけられ今に至る。

鼻歌交じりの爽やかだった気分は台無しにされ、投げ出された鞆の中の大事な絵が汚れて居ないかチェックした。幸いなことに教科書の間に挟んで保存しておいたそれは欠片の破損もないが、気分を害されたのには違いがないため倒れていた頭をもう一度踏みつける。

かえるが潰れたような鈍い声が聞こえたが、一切無視だ。

「あれ？先輩帰っちゃうんすか？」

「・・・ああ」

「もうちよつと遊びましようよー。折角久しぶりに相手してくれる奴らなのに」

「俺はいい」

「えー？つまんないっす」

ブーブーと文句を言う小倉をじろりと睨み付ける。喧嘩大好き殴り合い大好きなDMでDSな小倉と違い、極めてノーマル思考の俺はあいつほどイカれた頭をしていない。血を見て興奮してバーサーカーモードに突入もしなければ、相手が倒れた後も執拗に甚振る気もない。

小倉は俺より弱いが、俺より遙かにやばいタイプだ。一度目をつけたらとことんまで相手を追い回し勝負を挑む。勝てばそこまで、満足するまで甚振り倒す。負ければ勝つまで付きまとい、一見すると無邪気にも見える様子で近づきながらも常に隙を伺っている。

今だって間違えたふりをして拳や蹴りが飛んできた回数是一片手じや収まらない。一発一発に体重が乗っついていて、喰らえば骨くらい折れていただろう。

首に手を当てクルリと回す。こいつの相手よりも俺には重要な使命がある。

俺の恋の成就のために、俺は行かなくてはならない。そう、いつでも心の中にある、黒髪を靡かせた凜とした佳人のために、行かねばならないのだ。

「興味がない」

俺が興味があるのは心の女神、向坂藍^{さきさかあい}だけ。

闇を紡いだ漆黒の髪は、絹糸よりも尚美しく。白皙の肌に桃色に染まる頬。ふるいつきたくなる唇は紅を塗らずとも艶やかで、サクランボより美味そうだ。俺よりも随分と低い身長で、華奢な体は文字通り触れば折れてしまいそうなほど。腰など片手で掴めそうだし、確実に片手でも持ち上げれる。小さな頭が乗る体はバランスよく整っており、細い足は同じ日本人が疑いたくなるくらい長い。

最近気がついたのだが、下から見上げるとオニキスの瞳が少し潤み、悶え転げそうになるほど愛らしい。心の中では『可愛いぞー！』と大絶叫だが、実際に言葉にすると引かれそうなので堪えている。

何しろ三年越しの片思いだ。今年に入り同じクラスになれただけでも喜ばしいのに、この苗字のおかげで前後の席ときている。当たり前だが席替えなどという邪道なシステムは先日選ばれたクラス委員長に丁重にお願いして遠慮してもらっている。

隣同士になれたら、なんて夢想しなくもないが、何しろ俺は超がつく奥手。隣になれば横顔が見れるかもしれないが、今のようにつくりとはいかない。やはり後ろから小さな頭にある渦を毎時間眺めるのが幸せだ。呼吸するたびに微かに上下する肩だとか、たまに邪魔になった髪をさらりと後ろに流す仕草とか、小さな手がかりかりと動く姿とか、そんなのを永遠に眺めていたい。

その愛らしさは我が家のアイドルミニロップの『あいちゃん』の上に行く。勿論『あおいくん』よりもだ。『あいちゃん』も世界で類を見ない愛らしいウサギだが、番の『あおいくん』も負けていな

い。夜の闇を纏う黒毛が自慢の『あいちゃん』は大人しく控えめな性格の女の子で、ゴールデンオレンジの毛色の『あおいくん』はそんな『あいちゃん』を恋い慕うヤンチャ盛りの男の子だ。

自慢じゃないがうちのウサギたちは可愛い。俺が家に帰ればいそいそと小屋の入り口に立ち、ひくひくと鼻を鳴らして今か今かと瞳を輝かす。今まで動物を飼ったことがないからその良さを知らなかったが、彼女に出会い惹かれたウサギの中でもこの二匹を選んだのは正解だったろう。何しろうちの子は世界一可愛いのだから。こう後ろ足のあの丸いフォルムや、触れるとひくりと動く耳や、大きく円らな瞳や、たまに漏らす良く判らない鳴き声などもう愛しさマックスだ。

声なき声で叫びながらごろごろと部屋を転げまわっていたところ、不審人物でも見るような目で母に睥睨された。すぐさま姿勢を正し何もなかったふりをしたのだが、あの日から少しだけ母の対応が変わった気がするけれど気のせいだと思いたい。

そう、話しはそれだがうちの子はとにかく愛らしいのだ。しかしその愛らしさを持ってしても彼女には叶わない。何せ彼女は女神だ。きっと春の女神か花の女神か、いや、清廉な空気を思えば月の女神でもいいかもしれない。留まることを知らない美しさに敵うものなど居るはずがない。たとえ神レベルに愛らしい我が家のミニロップも、彼女にかかれは使役獣になる。ん？可愛い女神に可愛い使役獣。これは予想以上にしつくりかもしれない。

つらつらと想いを膨らませて歩いていると、不意に後ろから声を掛けられた。

「あれ？そこを歩くのはもしかして佐倉？」

のんびりとした声は聞き覚えあるもので、振り返れば案の定顔見知りが私服で立っていた。ラフな格好でコンビニ袋を持つ彼は、最寄のコンビニで買い物帰りらしい。訝しげに眉を寄せて首をかしげている。

「・・・木戸」

「どうしたんだよ、こんなところで。お前んちことは逆方向だろ？」

「いや、学校を出る前にメールが来てな。お前の家に行くところだ」「メール？つて、ららからか？」

「ああ」

ららとは木戸の妹の名だ。小学五年生にして三人の彼氏が居る自称恋のエキスパートの彼女は、俺が片想いを始めてから恋の師匠をしてくれている。ちなみに渡されるのは彼女のバイブルの少女漫画が主だが、これがまた泣ける。今まであんな女々しいものと馬鹿にしてきたが、きゅんと胸を締め付ける片想いの描写とか自分と置き換えると畳　　木戸の家は和風建築の平屋だ　　をどんと叩きまくるくらい感情が抑えきれなくなる。あまりに殴りすぎて畳を凹ませたら弁償させられたくらいだ。

年は下だがかねてから彼女の恋愛話には舌を巻いていた。恋愛経験豊富な相手を師匠と呼ぶのに時間は掛からなかった。

携帯を弄りメールを見せてやると、木戸は複雑そうな顔をする。彼は兄としてももう少し妹には男関係を整理して欲しいらしいが、その内刺されるぞとの忠告は流石に行き過ぎている気がする。

そんなこんなで彼を伴い師匠と語り明かした俺は、手描きの絵に一文書き添えることにした。

ばくばくと高鳴る心臓を宥め、深呼吸しながらそつと目的のロッカーを確認する。『向坂』と書かれたそれは学年どころか学校でも唯一だ。俺が調べたのではない。何故か情報通の木戸から聞き出した。

とにかく、彼女のロッカーの前に立ち、愛らしい色合いの封筒を両手できゅっと握り締める。皺が寄りそうに鳴ったので慌てて力を緩め、祈るように額に当てた。

今日は俺の一世一代の晴れ舞台だ。いや、清水の舞台から飛び降りるひだ。ん？何か違う気もするが、とにかくそんな日だ。

昨日、師匠の下で愛読書を拝見したのだが、今は和風のコミックに嵌まっているらしい。平安時代の男女の趣を嗜みながら切ない女性の心の揺れ動く様を描いた傑作品は涙なしには読めなかった。

何しろ相手の男が最低で、主人公に文を送りながら同時に二人、三人へと同じような手練手管を使って女をたぶらかしていた。最終的にその男が本気になったときには遅く、主人公は影に日向にと支えてくれた幼馴染の青年へ身も心も捧げるが、彼の誠実さつたらない。

どれだけお色気たつぷりの女が迫ろうと、親に縁談を進められようと、政敵となった主人公の初恋の男に陥れられようと諦めずに真っ直ぐに志を貫いた。そうして遠方から実直であるが想いの籠った文を送り続け、とうとう主人公の心を射止めたのだ。

あれを読んで目が覚めた。やはりメールで告白など邪道だ。顔をあわせて行うには勇気が足りない俺には、恋文こそが丁度いい。というか、そもそもメールアドレスを知らないのだが。

とにかく手紙の素晴らしさを知った俺は、自分なりのアピール方法である絵も交えて彼女に一番伝えたい一言を書き添えた。

即ち病弱で華奢な彼女に想いを籠めて一言、『生きる』と。

何しろ彼女は儚げで可憐で吹けば飛んでしまいそうなくらい華奢である。先日も目の前で倒れられたし、とにかく健康に関して心配だ。

彼女が儚くなつてしまえば、俺の人生も儚く消える。俺の想い全てを籠めた一文と、愛のキューピットである『あおいくん』の絵。これは昨日保健室で寝ていた木戸にも見せてやったものだが、人生でベストスリーに入る傑作品だ。

愛らしい瞳から光が溢れ、キラキラと輝く体に天使をかたどる羽とわつか。どう考えてもキューピット。俺と彼女を繋げてくれる、俺の想いを伝えるキューピットだ。

正直こんなにあからさまに想いを伝えて大丈夫だろうか。あの漫画を参考にすればもう少し密やかに想いを忍ばせたものだが、不器用な俺には直接的な表現しか出来ない。

どくどくと鳴る心臓の音を意識しながら、下駄箱の小さな上履きの上にそつと封筒を滑り込ませる。桃色の便箋に、彼女のイメージである黒ウサギのシール。コレクションの中でも特にお気に入りを使ったのだが、気に入ってもらえるだろうか。

以前師匠の家で読んだ漫画には、裏表の激しい美少女が恋文を見つけた瞬間にびりびりに破つたりしていたが、まさかそんなことにならないだろうか。

無駄に緊張してぎちぎちになる体を強張らせ、彼女が来たら判るようにそつと下駄箱の陰に隠れる。彼女の登校時間は部活に入っていない割りに早いと木戸から聞いているので、きっとそろそろ来るだ

ろっ。

時計の秒針を気にしながら待つこと十分弱。ついにその一瞬はやってきた。

かたり、と音が聞こえ、顔を覗かせると、神々しくも朝日をバツクに靴を脱いだ彼女の姿。

今日も艶やかな黒髪を靡かせ、凜と背筋を伸ばす姿がうつとりするほど麗しい。見惚れずには居られないでだちに暫しぼうつとしていたが、その白魚の手が下駄箱に掛かり、ごくりと息を飲んだ。

あの中には俺の入れた恋文が入っている。

果たして吉と出るか凶と出るのか。

瞬きすら惜しんで眺めていると、手紙に気がついたらしい彼女は切れ長の瞳を丸くした。珍しくもあからさまな表情に、こんな時でも胸がときめく。心臓が破裂しそうに緊張していても胸はときめくものなんだと、冷静な頭が暢気に考えた。

逡巡するように動きを止め、ゆっくりと小さな掌を伸ばして封筒を持ち上げる。表面を見て、ひっくり返して裏返したのを確認し、俺は重要なことに気がついた。

名前を書き忘れてしまったのだ。

あれほど傑作品の絵に、想いを籠めた一文を添えた挙句差出人不明。何たる失敗。何たる手落ち。

ぎりぎりとお歯を噛み締め手近に合った何かを握る。力をいれるたびに奏でられる不協和音すら耳に入らない。

もし万が一あれを他の誰かからと勘違いされ、しかもそれを利用した相手の求愛に彼女が乗ってしまったらどうしよう。自分で言うのもなんだが、あの恋文は他に類を見ないものだろう。

彼女が相手を勘違いし、尚且つあの手紙を気に入って嬉しいと相手に告げたら、俺の心は張り裂けるだろう。ついでに相手の男の顔も張り裂けるだろう、勿論俺の手で。

中身を取り出して瞬きすらせずに見惚れる姿に、喜んでいいのか悲しめばいいのか全く判らない。

手の中でめきめきと音を立てて形を変える『何か』に更なる力を籠めれば、ゆつくりと、それこそ映画のワンシーンのように彼女がこちらを振り返った。

一瞬の永遠。

夜の闇よりも美しい漆黒の双眸が俺を捉える。

その瞬間、俺の心臓は確かに止まった。

三年間憧れ続けた恋しい人は、ただ一人俺だけをその瞳に映す。

この幸せが誰に理解できるだろうか。

今が永遠に続けばいい。そんな愚かな願いは、瞬きする間も続かなかった。

「っ」

息を呑んだような音が聞こえ、彼女の力が膝から抜ける。

長い黒髪が扇形に広がり、手が宙を搔くようにして動いた。

こちらを眺めていたオニキスの瞳は閉じられ、顔は真っ青どころか白くなっている。

今にも儚く消えてしまいそうな彼女に駆け寄りながら、俺は思わず絶叫した。

「あなや

っ！！！？」

昨日読んだ漫画の叫び声が思わぬ高さで出てしまったが、最早自分でも何を言っているか理解していない。

今までの人生で一番の全力疾走をして、彼女の頭が床に叩きつけられる前に辛うじてキャッチした。

全身で受け止めた華奢な体はとても軽く、意識を失っても手放されなかった恋文に心のどこかで満足を覚えながら。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7273o/>

トイレットペーパー戦争

2011年5月15日13時27分発行